

消閑雜抄

大正十五年五月下旬起筆

特別

14

1919

382



清洲新抄四

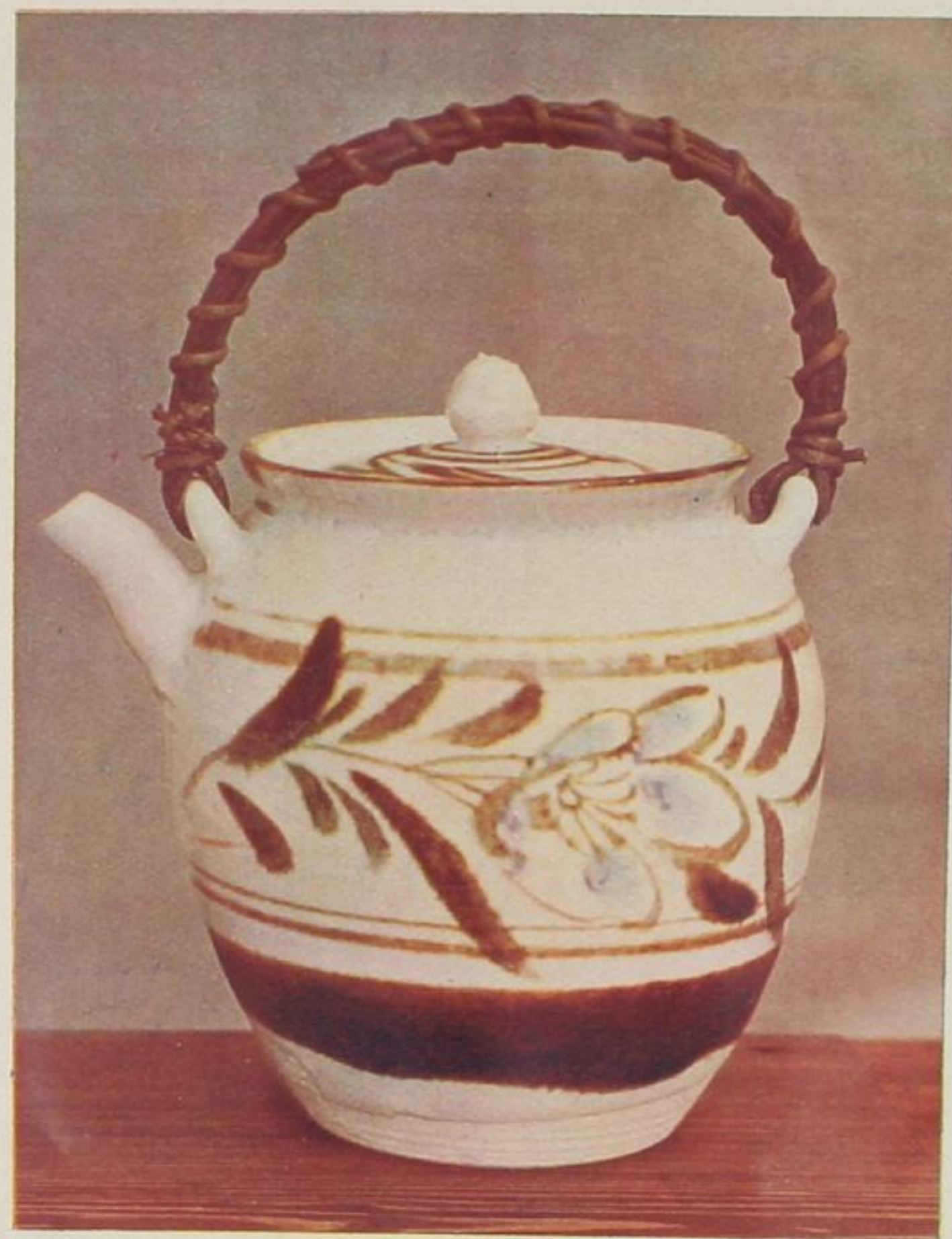
大正十五年五月廿一日起筆下

○此項訪問を漁つるも自書を湯ることが念々困難と
するに、その儘之を左の二書を湯り

一岱史 查士隆 萬曆内 七六冊

一岱覽 士冊

此二書は、支那の泰山の事を知り、此よりある前年
海防の節、海南から登山嶽とある所の日割を
定め、此より北京、清江、中書、緯を数軒訪ふ。此
の二書を湯き、得ん、此が終、一書、力、年、入らる
う、つ、泰山志、日本、子、然、兄、あ、け、る、が、是、ん、の、路、り



傾城禁煙氣插壺

2 河略と夫々、岱史の明の志隆の撰人により、
 明の汪子卿の著を改題増補し、この志士
 隆の修めにより、この劉勅が増補し、
 七ある夫々、岱史の撰題が萬曆版であるが、
 士隆の岱史、最も稀艱のものがある、岱史、乾隆
 五十八年輯出、所記嘉慶十年刊行、
 編者、泰山書院、長陶山唐仲冕、泰山志を
 大成し、此とある、此二書、泰山研究、
 ともあるが、漸やく手に入つた、
 耳、此頃故入、泰山と云つて、
 玄耳、泰山、通じ、
 日本人、泰山、
 此人の在、出、

北極に新航路を開き

アムンゼン氏の満足

今後の仕事は後輩に委せる
新しい経験の種々

船員は目下船体を解体して居る、解体された材料はこれをノームに運ぼうとする目的である、今回の旅行を通じて飛行船の操縦は実に美事に行はれた、キングスベールを飛ばしてよりポイント・パロウに達するまで四十六時間を要した、今回の旅行は種々有難な知識を吾等に與へた、第一に気球の外層を非常に丈夫に作りねばならぬ事、さきに述べた如くプロペラーにぶつけられねばならぬ、氷片が非常に勢ひで気球の外皮を突き破る有様は幾度か吾等の胆を冷やした、幸ひに應急修理早く願ひたので極地の氷原に着地するの必要を免れた次第である、また気象を測定するに充分の設備を必要とする、ただしこれが完全に行はれれば氷が氷機に付着する危険の最も少ない気層を選んで飛行する事が可能となるからである、また機油及び機室面が氷つかないために技師が不測の動かし居なければならぬので非常な骨折であつた、ポイント・パロウを通り過ぎて後アラーの無線電信局に着陸の通信を為すまでに廿四時間を必要とした、北西の強風を突撃して進んだ時のノルゲの速力は一時間六十マイルで高度は氷原上わずか百尺であつた、余(アムンゼン)は今回の成功によつて充分な満足を感じた、これで途を開いたからこれ以後の仕事は新時代の人々に御まかせしたい、北極には陸地はない、また多年問題となつて居た百万平方マイルの無人土地なるものも結局傳説に過ぎないものであり、極地とアラスカの間は一、二万里の氷原に過ぎない事が明白になつた

二書より自
 金山見り
 折角南宮の
 其内杖を
 第一登山杖が
 以遊克克
 せの、加式印し
 今、行かめら
 お陰を
 (同上記)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

2 河路に生ずる、岱史の時の志隆の撰人比よび

(可認物便郵種三第)

号一十百七千七万一第

劑腸整胃健痛腹痢下

丸腸固

價 藥
廿錢卅錢五十錢一圓
二圓三圓五圓十圓
本舖 大坂市東區伏見町
會社 谷回春堂
熊野穴阪一七〇番



一すはらしい、固腸の散薬を味ひ給へ
トツカピンは一日一錠の高貴薬にして
り、益となり、脈系腸管を癒やし、
化して、生薬益の太神神を強健化
清肝年益々其天賦機能を増進して
附に、精力は増進して、深みども健
◎朝の一錠—頭腦明
◎晝の一錠—能率舉
◎晩の一錠—青春の泉
東京市銀座麩町八番
發賣元 丁
大坂市西區立賣
北通二丁目九番
◎全國海到る處の有名
品切の箱は發賣元へ—送料
前金注文—送料

ある、この查士
増補し、比よ
版であるか查
岱山覽、乾隆
行々入ておる、
泰山誌を集
ん、おの大切
北者、澁川玄
ろつて現らん、
柳宛しておる
在、出、この

十二行

無い自分北人と相識の關係がある、二書も自
分の手に入つた、自分、滿南から登山見ると
加、登山すると帰りの船、間に合ふ折、南宮の
乗船切符と捨つこととする、已むらくも登山を
見念ひし、今、この道人の遺感に感ずる、其内、杖をえ
登山の志もあり、此書を買す、第一登山杖が
出来ぬと云ふ、此者、杖、藉し、臥、遊、克、死
(五月廿一日記)
○近來の快事、北極探検、アランゼの、加、成、即、
ことである、北極：陸地の多の、こと、念、て、行、か、め、ら、
此の成、即、無、海、電、信、と、飛、行、機、の、お、陰、を、あ、り、
念、と、新、報、の、切、り、ぬ、き、を、取、
(同上記)

ベルナルド・エァン・ベッテルハイム (Bernard Jean Bettelheim) 畧歴

- ▲西歴一八一一年六月、匈牙利ブレスブルヒ(現チェッコ・スロヴァキア)に生る
- ▲一八三六年九月、伊太利パデヴァ大學より醫學博士を授けらる
- ▲メヘメット・アリ(埃及現王室の祖)の軍艦に軍醫長となる
- ▲土耳其の陸軍聯隊軍醫長となる
- ▲一人を醫するよりも萬人を醫するの大なるを悟るや、倫敦に來り、基督教を修め、リヴィングストン(有名なる阿弗利加布教兼探險家)と同窓の友となり、一は阿弗利加に入り、一は琉球に到る
- ▲一八四五年九月、帆船にて英國出帆、翌四六年五月二日、即ち本年より正八十年前に琉球に上陸す(日本弘化三年四月六日)
- ▲ベッテルハイムはベッテルの支那音伯德令に依り自から伯德令と稱へ、今の沖繩縣那覇市波ノ上護國寺に事實上禁錮せらるゝこと九年、其間琉球政府及び在番の薩摩役人より有らゆる手段を以て『苦迫』せられ、一般人民よりも石まで投げられ街上に打ち倒れたることありしにかゝらず、施藥、診察、治療一日も止めず、又種痘術をも行ひたり。又琉球語を以て基督聖典を翻譯せり、琉球の文學者が其の『琉球語は嘗て印刷せられたるもの、中、至純至美……言語の美なるに驚けり』と記せるを以ても亦た其の文學上の價値を知るに足るべし、此書今や世界希觀の一となり、本邦に現存するもの五冊(?)
- ▲米國ベルリ艦隊の琉球に來るや、其間に斡旋し、琉米條約成る、ベルリ提督より銀製の大洋盃を贈る
- ▲琉球譯聖典の淨書成るや、之を印刷に附せんとし、米國艦隊に便乗して琉球を去る、時に安政元年
- ▲米國に在留中、南北戦亂起るや、イリノイス州義勇軍の軍醫となり、ウィックスバーグの大劇戦に参加せり
- ▲米國南北戦亂の後、米國にて琉球及日本の紹介に努め、一八七〇年二月九日(明治三年)モンタナ州アルタスフィールドに死去す、行年六十九

以上の如くベッテルハイム博士は匈牙利、チェッコ・スロヴァキア、埃地利、伊太利、土耳其、希臘、英吉利、支那、米國、琉球(日本)の十國にそれ〴〵因縁あるを以て、茲に博士琉球上陸の八十周年を期とし、其の九年間寓居となせし沖繩縣那覇市波ノ上に地を相し、博士を徳とする十國よりの石を以て土臺となし、米國よりの記念碑を其の上に建つることとなりしなり

閑院宮殿下より右記念碑に生木一對御下賜、小村侯爵、澁澤子爵、三井男爵より各々生木一對、文明協會々長大隈侯爵、雨潤會代表陸奥伯爵より各々生木一對寄贈

ベッテルハイム博士は那覇市波ノ上に九年間居りました。波ノ上は珊瑚礁の斷崖で、白浪岩角に碎け、かの王夢樓(清朝第一等の書家)が『石筍崖』と稱へ、月の夕に琴の音を聴き『鯨人如解聽。清淚濕氷絹』と千古清妙の句を得た處であります

ベッテルハイム博士は二頭の英吉利犬をつれて琉球に來られました。まことに忠實なる犬どもで、入つては主公の爲めに其の寓所を衛り、出ては主公に随伴し、群れ集る琉球人の垢罵迫害を睨みつけました。そこで琉球人は博士と犬とを附物とし、更に又當時琉球にては眼鏡なるものは老人が爪を切る外には用ひずと思ひたるに、博士が居常これを其の眼にかけると、博士をインガンチャウと呼びました。『インガンチャウ』とは『犬眼鏡』の琉球音で、嘲笑の語となり、罵詈の徵象となり、遂に畜生と同意味の呪ヒの言葉となりました。「犬眼鏡之歌」の惡詩があります、惡詩も惡々詩ですから十分十二分の御斧正を願上げます

犬眼鏡之歌

犬眼鏡。犬眼鏡。恰好眼鏡爲名犬爲姓。大覺朗然絶是非。呼犬喚豚任嘲評。私期穢土一日功。却勝百年之脩行。勇猛精進大音聲。究竟肯不惜身命。面壁九年古所聞。東方今見西方聖。醫而非醫聖而醫。匈國博士伯德令。我今尋迹來流虬。石筍崖頭攀石磴。攀到絶頂浩浩歌。天颺颯至波欲迸。歌聲挾波感魚龍。又訝鯨人出水聽。

志賀重昂草

○近時の岱史を一夕翻閱此海三作に比古ハ前月海に
以り萬曆の查士隆が撰人の泰山志中有名なる方ハある
版式が區々であるの氣がつかつて、よく見ると清初の補刻
に版が錯綜してある清初より早く版木があら散佚
して全部揃つてゐるつと名くふ、舊版七つとんとの
磨滅して変がある、巻尾に左の版があるを補刻
の在末が認められたる、爰に抄録す

康熙三十八年重訂岱史跋

查岱史一書自明季嘉靖間日離憲憲吳
所創厥後離憲譚命演灤分司查編輯成
帙付之梓人而岱史之名遂傳迨至 皇清甲
午年離憲傳翻刻前版重加纂述於是

名卿士大夫之所傳記載口入集中者愈增炳
蔚今經數十載矣已卯春仲 聖駕南巡
各憲委諭裝訂以備 御覽不料所存
木板散失二十餘頁緣道署遷改搬
移遺失而且版篇殘缺後先失叙爰遍訪
歷下紳衿士庶從齊下得譚憲原刻一
部將木板散失者命梓人補緝各美所補
合計二十二篇其殘缺者一為補正泰傳
憲增刻未得內查少無字部才六十六篇
一頁疑字部八十二篇一頁佚吳日訪獲
再加添補遵奉各憲令諭幸得與聞
未敢自加冒昧也

山東都轉運塩使司經歷司經歷呂繩祖謹

跋

右の仕末は此の岱史の意の、不尙のものがあることが知られ、併し今、萬曆の原本を手に入れた由から之れは満足する以外に無い、あるべき所を附記して置くが、本書の首端に「東巡紀盛」と題して乾隆帝巡幸の紀が載せてある。

○前掲査士隆の岱史は増補を欠けた他の一本の、そのことを首端に附記し、その旨の別動の増訂本は、崇禎元年の序から、山東の版をうけたことあり、その初版に元比時甄別がついて、その記が再び見れば、此本のあり、前掲の岱史と異

つてある、これと全く改刻増補したもの、萬曆の舊版との全く趣を異し、査士隆本と異する所が少く、すなわち泰山研究に、此書も無くして、これと、一筆、岱本三種を得た、海川の底流と謂つても得ぬ。

○岱史や岱苑を、魏澂の「岱史」の、あるが支那に、この「岱史」も、泰山を、神話に、南に、ある、岱史といふ、数千年、年、宗教の、的、ところ、神聖の、所、ところ、ある、場所、不、歴朝の、君、主、の、め、つ、す、之、を、訪、ひ、其、都、度、其、禮、の、ま、か、あ、り、山、の、人、格、化、と、い、う、く、の、傳、説、か、あ、り、不、思、儀、る、こ、も、あ、る、其、味、の、あ、る、こ、も、あ、る、あ、

の雄大の山のこころにあるから、倭後神話に自ら北の
味もある。うまき神話を綴つて見れば、又その意味
があると思ふけん、自ら自命をまがのまを果すまの
のひまがまの。

○世とうじ才の天地とらうた、各戸、午前と午
後に、黒楳を耳、當り、その、居る、の、ら
いろくのものか、や、こ、え、の、音、は、か、も、講、演、ひ、も
おと、き、響、の、ま、も、種、の、ま、の、ま、の、か、耳、入、る、自
然、宣、傳、の、用、を、も、り、あ、の、ま、育、の、役、も、立、つ、
新、考、の、代、用、も、あ、る、。父、も、勉、め、て、う、じ、才、を、聴、く
設、備、を、す、る、の、も、無、記、さ、ま、い、之、ん、を、聴、く、設、備、を、
し、て、大、概、高、平、を、戸、め、に、掛、り、銅、板、を、め

こ、引、く、市、中、に、出、る、。見、る、と、あ、る、。と、北、平、が、殖
えて、来、た、。温、陽、の、作、也、價、を、高、か、ら、し、め、以、て、お、ま
ま、の、北、の、應、用、が、廣、く、ら、る、と、お、ま、の、大、切、な、働、き、を、
ら、す、。こ、の、り、由、に、英、國、の、芳、働、多、議、。見、て、七、判、し
得、る、。政、府、も、芳、働、固、ま、る、。巧、み、の、北、の、概、算、を、利、用、
し、て、宣、傳、を、各、所、に、行、き、届、け、た、。其、の、概、算、を、(附、以、よ
か、略、を、示、す、趣、が、あ、る、。民、衆、お、ま、の、の、後、の、改、次、り
遠、か、ら、り、北、概、算、を、藉、り、。お、ま、の、事、を、め、こ、の、ま、ら、る、。か
あ、ら、う、。

○北、頃、久、し、振、り、大、改、く、ら、い、つ、て、清、在、市、快、心、と、感、し
た、の、の、自、動、車、の、遠、近、と、物、を、得、る、機、の、場、一、物、を、え
つ、て、あ、る、こ、の、こ、と、也、。あ、る、。價、が、甚、だ、廉、い、あ、る、上、に、チ

ツプは断死受取らぬ、斯うするは自動車の
ハ本欲を反押し比と云くぬ、東京に於ける自
動車のハ、其の勢が洋品にあり。

○又寝臥劉勅本、佞史を撰む、此者各季の首端
に劉の徳況あり、文章復見也、其をきとて、泰山
に對する、明刑の待徴ハ勅を屬し、秦以
歴朝の舊習を打破するに在り、劉の序の
二曰く

其於歴代勅祿之得失、漫無短長、得不令龍の
氏地の咲人牙、而後之勞民病回、行且階之渾
赫、青靈、及為民厲、則又載華者之罪也
又泰山紀論中と曰く

概自唐虞巡用狩而後、以及秦漢唐宋之間、君好
名乎上、臣獻諛於下、信方士之讖書、求長生之
秘訣、六龍一駕、常騎林行、庶官百辟、羅立於
祠壇、鐵馬金鞍、遍匝於清野、且檢金刻玉、誦
德誇功、以勞民病回、嗚呼、曾謂泰山不如某
放哉、卒之秦災、風雨、漢汚簡錄、東封西
禪、亦或承之、辱耳、迨及我明、正東嶽
之名、非、深封禪之誤、習、真聽、心、高、於、千、古、
而典禮中、於百代矣、泰山有靈、其必稱我回
家、而奠億萬世不拔之基也

勅禮を屬し、其の民力を勞し、四帝を糜す、其の
必多し、泰山を平比化し、其のあり、明朝の

○亡友高山松雪の三十三回忌に丁りぬる高山の家を
上座の執事お勤に親族の養育を命ずることありし
余もこの追懐の詞を陳せり然るも、願ふに廿三回
忌辰も同じ場所を同じ台を催し夫張自分か
衆に勤し親族をこゝに追悼の詞を述へんこと

を思ひ出すが鳥免也と早く十年を経て一は、早く
歳月の流るゝこと考へると三十三年 equal 睡る
あさけんども、一世の三分一強と考へると短日月ひまの
山のそ等とも年齢が五六才も長し、四十一歳といふ
若い時を折いばかり、三十三回忌に同家國公生
きてゐるのむあるが、若し善道の大壽を保つ折
かぬれといはる、三十三回忌に友人の悲しく一人も坐席
か出来ぬといはる、儼るゝ友人が廿三折かぬれ
す、同輩のこの八十三を、澤山、
或稀るる陰外例の外、こは皆之を、
う、そ等か三十三回忌に丁り尚ほ生存してゐること
から、友人を思ふ、友人か、
も若か、い年、折

ことを痛まされるを得る。是とせし自分のことと
 是れ由前日の事よしが是れ日柄があるから尚ほ全きを
 得ておることと思ひしを得ぬ。志が思へぬ自分
 の此情む事柄が進歩の河を流るるの最後ひある
 此次の五十年長ま私むううむむむ格せ直接の因
 縁のある人々の皆故人とすつて五十年長の此世の
 今より報先の序にそりゆの名も故人として現る
 ることとあるは是れ角に十三回忌をせん生取
 一と故人を思ふことと出来ることと仕合とせぬ
 かるるまの此の三十三年間よりさうつく同定
 ●麦遷●が多し、今頃の死亡の数が四十九名
 に達するは二十三年間以後より七十名死亡

一とある追の死亡年が高等なる。此十年間の
 格せの相續人が及んである。何れも大に悲し
 ことと尚ほ鈴木家より三人及んである。何れも
 情のまじりある。のまじりある。格せ及後三十三
 年一と孫の時代よりさうする。歳が二三あること
 を思ふと其の麦遷のありきま教ふことを得ぬ
 存在せざる。此のつとめおる。故人七進徳
 一とこの情の切なる人々の承継者であるか私著の故
 格せとある。普通の変遷の情も或倍々純りある
 がある。是れ何れもいふと山に此等する。格大の抱負を
 持しておる人がある。此れ其の抱負の百分の一七進行
 一得す一と折いたのひある。山を築きし井護士と

解するこの向違つてあることいふまでもない彼
ハ経世家の才ありし事業家の才ありし政治も社
会も百般の事業も是れ抱負かあつて是れ
加理志の止まずし行の案かあつては、法律家ハ
先づその事と小さく制限すしやうある意味のあるよ
か、而山ハ今も異つて頭腦が大きい其の策する所が絶つ
て大々々、縦横の才略が有れば、是れが公正である遂行
の熱心が深切である且つ實際の心あつては、生前の
人に親交し一時ある計畫の案をも少かさずと
一言へての志ありし軍統帥の才ありし此ハ遂行
の實際を高き柄も是れありし此ハ遂行
ハ一案ニ案ニありし不譯の、舞臺が終り

大きいのがおいての領解し得るものこの無理ハ無
つた若し此人の没命三十三年をもちめ二十年
乃ち六十位までの天壽があつては、とんふびあ
つたうか、三宅雪嶺の回忌を以て山ハ回忌中一番
早く大臣とありてありしとあるが、是れハ勿論である
彼人の政治が道楽であつては、政黨に就ても當時の政
黨に懐くも、うらなひある、世々一黨を又かか
樹りて是れを平いれ、あつては、生前既に實業家の
と信を携へて、事業を興へんとす、既に不可
りの地があつては、是れ今大事業を経営してある
う、少くとも大事業家の顧問とありてある
う、事業を諒し解し且つ公正であるといふ

のい各大会社をわの競を顧問役と仰いとい
あつて、悦も満得いあがハナ者能の志願の實
業界のあつた方面から相談役として一
てみる扱も北人と同じ扱があつたといふこと想像
する。君ハ井澤士として地主や此の關係を
備者の關係を知りぬいて、その頃のまゝの譯議の
扱らさうといふが、今時北人が在せといふと北方面の
協調も才一人者であつたといふ、其の行言を考へし
た言校もいふもモット大ききころ進んむかぬらう何
の折、洋行もして外國の事情に通じ、世界的大業
も立ていふあつて、財産増進の流泊もあつたとい
ふも自然に大資本を有する人となつたといふあつて

その自ら私を分け奉仕するものもあつた
あの融資をいふあつて、コンナ風にお金を馳せ
と北人が早く死人といふ酒家も此分も大なる損失
があるといふ思ふ、翌年の別成りて抱負を行
ふのいこのからといふ不いあつた、今若し存命とす
と七十四歳もある既に類敷もあるけいも大概
の抱負の實現といふいふあつた、直に惜し
いことといふ、自分北人の早世を惜む情の強
い北者の意味から来るものといふ、つては、ま
惜しいこと

紀州家の圖書整理から 世に出た貴重な文獻

歴史を覆へす「續異稱日本傳」 日本に關する外國文書二百卷 その他發見された珍籍一萬冊

徳川家圖書 高木文氏談

震天で東京帝大が貴重なる和漢書の大多数を烏有に歸したので、徳川家からは南支文庫を寄贈してこれを補つた。私が今回徳川家から命を受けて整理したものは、その残りの蔵本約一萬冊で、徳川家としては手離し得ない貴重なものだけに、いはゆる稀世の秘書珍籍が底層深く蔵されてゐた。今こゝに、そのうちの最も注目すべき二三を挙げてみよう。

先づ國寶物に入るべきものに阿佛本源氏物語がある。これは家康が駿府にゐられた頃から紀州家に

傳はつたもので、鎌倉時代に阿佛尼の手寫したものと稱せられてゐるものである。従前世間にあまりその名を知られてゐなかつた寫本で、恐らく今日残存してゐる源氏本では最も古い年代に屬するものであると信する。しかもこれが五十四帖全部揃つてゐることは何よりも喜ばしい事實である。裝ていは後世のものであるが極めて見事な、そして現今の西洋とちに見るやうな堅牢なものである。内容は、文章において、今日世に流行する源氏物語とは大いに異なつたところがあり、國文學上興味ある

續異稱日本傳卷之一

尾崎雅喜有魚著

阿佛本源氏(一の部)
續異稱日本傳(その第一頁)

前漢書地理志曰東夷天性柔順異於三方之外 師古曰三方指南西北也 故孔子悼道不行設浮於海欲居九夷有以也夫東夷海中有一倭人分爲百餘國以歲時未獻見云 師古曰倭音長又今猶有倭國魏畧云倭在帶方東中大海中依山島爲國度倭十里後有國皆倭種

王氏談録曰祥符中日本僧寂照未朝後求禮天台山先中合守會誓寂照經由來謁寂照善書逆習二王而不習華言但以筆札通意時長兄爲天台字中合以書寄之書

を興へるであらうと思はれるのは、『續異稱日本傳』の出現である。これは大坂の人、尾崎雅喜が文化前後にもせよもので、三百十五冊より成り、徳川家へ獻じたものである。尾崎氏より先に頼朝松下見林が、『外國文書中、日本に關するものを蒐集して『異稱日本傳』十五巻を物したが、これはそれに洩れたものを克明に探案集成

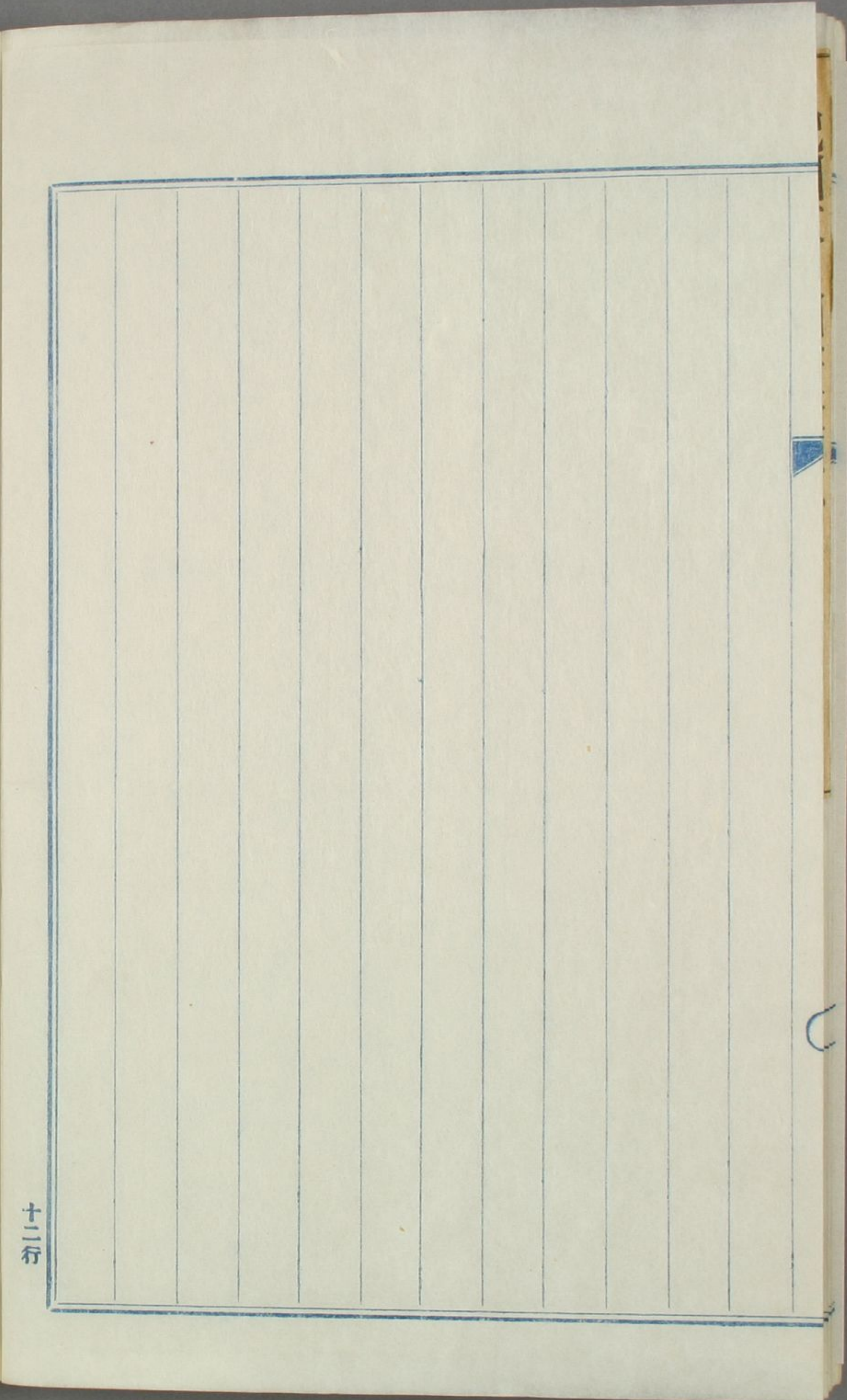
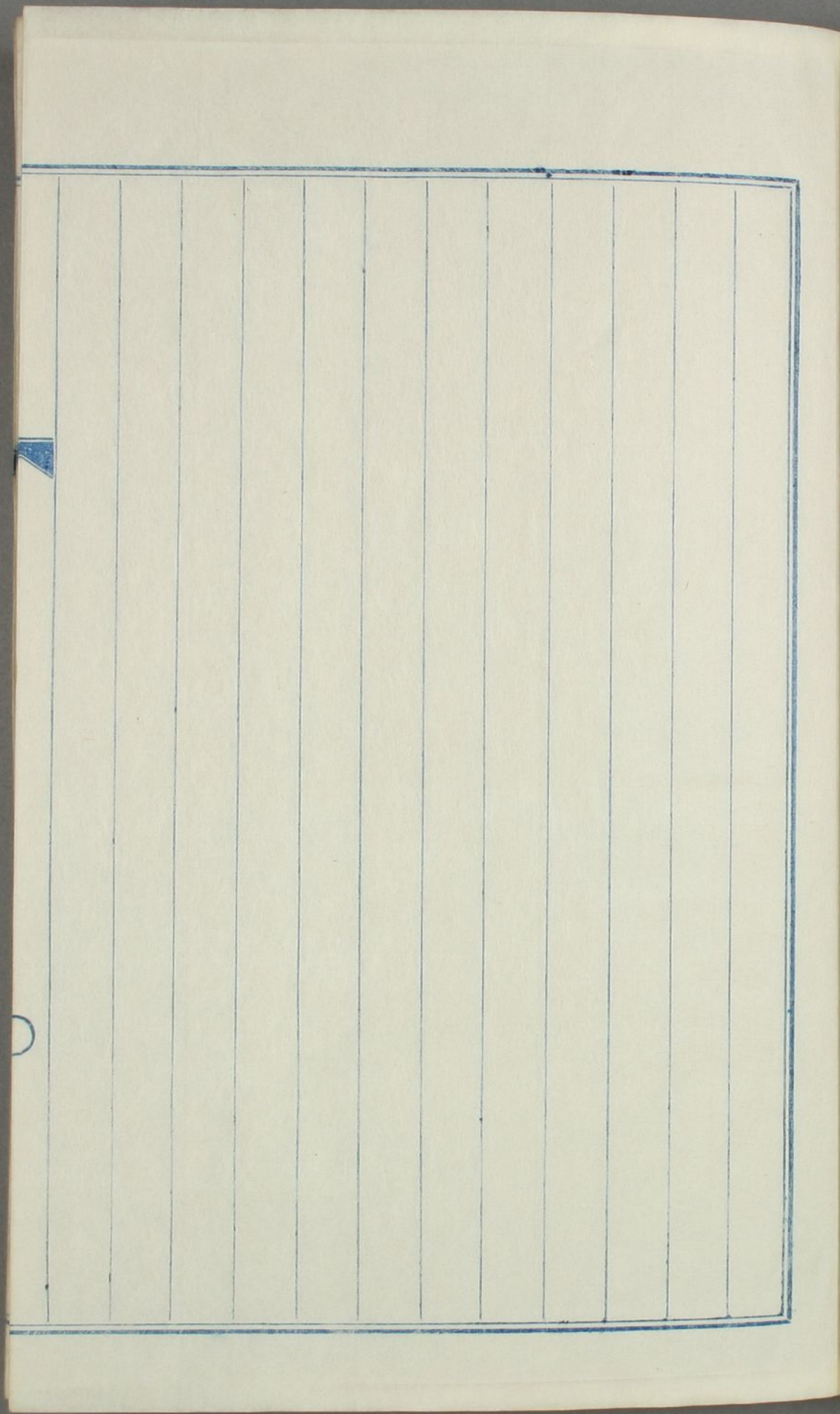
柿の花

建昌 大夢

雨一過麻刈るに鳴く枝蛙
麥葉の灰にまみれし青蛙
汁堂の閉を落つるや柿の花
柿の花落ちては踊り淋しかり
青嵐妙義をおろし村を吹く
池の桶に泡すはれ行く日永かな
日永猫鼠の草を噛みに出し
陶窯の廢れし邊り草萌ゆる
旋風して二月の池の埃かな
雜木山芽張る雨なり雉子晴れる

この『續異稱日本傳』は天下に存するたゞ一本であらうと思ふ。各巻ともに丹念に手寫したもので、詩文はもとより行状文、通商貿易、海防、戰役、外交等日本に關する一切の外國文獻を網羅してゐる。そのうちかの足利時代に來朝した支那僧の日本見聞記の如き、當時の日本を知るには缺くべからざる珍書であらう。又倭寇や朝鮮役に對する支那側の觀測も得がたい資料であると共に、吾人をして驚くるとなき興味をわかせる。倭寇に對して被害者たる支那はいかにこれを見、如何にこれに對策を講じたか、細大もらさず集められた資料に徴して一目瞭然たるものがある。

朝鮮役の如きも、従来の日本側のみの記録では、連戦連勝で凱旋したかのやうに書いてあるが、これで見れば諸戰にわたつて日本軍の苦戦は察するに餘りあるのみではなく、秀吉歿後、わが軍の朝鮮引揚げの際における狼狽さは從來史上に隠されてゐただけにみじめな感じがする。そしてあの當時の情勢からいへばそれが正しいのではなかつたかと考へざるを得ないのである。とまれ、この書の出現は、これまでの史實に幾多の書昔へを要求するであらうし、同時にこれだけの大事業を成し遂げた偉大なる學徒のあつたと對して後人に奮起を促すとであらう。



十二行

以下
5 丁
白紙

積書

地下 納骨室 能石室 及 小石室 數石 小石石

廿三石 存 迄 仕上 掘付 石 二 俟 共

金貳百七拾五圓也 但 運搬 掘付 手 結 金 一 降

地形 石 且 石 中 十 尺 花 崗 石 石 大 四 十 尺 下 石 二 十 二 尺

估 上 掘付 階 能 石 一 ヶ 共

金七拾五圓也

銅 扉 二 枚 七 拾 五 圓 也

金 五 拾 五 圓 也

コンクリート 材料 セメント 砂 利 砂 代

金 五 拾 五 圓 也

運搬 納骨室 掘付 石 塔 建 方 手 結 金 約 五 十 人

金百〇八圓也

花立石、何彫刻代共

金貳拾貳圓也

二号圓、石橋三ノ角、大段花崗石、右磨台石、三ノ角付

金貳百五拾圓也、但、文字彫刻代ヲ除ク

三号圓、石橋、三ノ角、大段花崗石、右磨台石、右重付

金貳百貳拾圓也、文字彫刻ヲ除ク

合計金七百九拾圓也、外、青砂利代

右三通、了、此座、坐、也

左、右、十五年三月四日

石材 販賣 佐久間與吉

電話三一六番

電話三一六番

草地地形、前面右、通路より高八寸、左、右、約一尺半

均高、故、土、抱、地形、下、右、二、尺、前面、左、側、二、面、の、地形、下、右、二、尺、花崗石

尺、二、寸、立、下、其、上、の、地形、上、右、中、尺、ア、寺、五、分、花崗石、上、叩、仕、上、前面、のみ、切、仕

上、右、二、寸、中、十、尺、入、十二、尺、据、付、下、(才、一、号、圓、者、也) 前面、階、段、石、中

花、尺、右、三、尺、左、七、尺、花、ケ、据、付、昇、降、二、便、ス、(后、塔、敷、石、地形、間、へ、青、砂、利、ヲ、敷、ク)

納骨堂、築、造、ハ、土、中、深、サ、六、尺、ヲ、掘、リ、中、五、尺、右、九、尺、左、七、尺、コ、ン、クリ、ト、シ、

叩、キ、(地形、ハ、)松、杭、振、込、ニ、要、ス、其、上、ハ、狹、野、産、尺、六、右、ヲ、以、テ、

外、側、四、尺、八、尺、角、(納骨堂、右、部、三、尺、角、ト、ス) ヲ、積、上、テ、納骨堂、

不、左、右、ハ、壁、厚、ヲ、要、ス、故、ニ、花崗石、(一、尺、中、ア、右、寸、右、四、尺、四、寸、以、テ、)不、左、右、ト、為、ス

銅、扉、(一、尺、中、右、寸、五、寸、)取、付、テ、納骨堂、外、ハ、納骨、便、ノ、為、メ、

段、石、四、段、ヲ、据、付、テ、外、部、ハ、雷、路、ハ、ル、石、(不、左、右) ハ、全、部、花崗石

ヲ、用、ヒ、不、左、右、兼、敷、石、ト、シ、一、尺、中、ア、右、寸、花崗石、ヲ、以、テ、あ、い、か、ま

ニ作り此入ロリ西復テ、合口ハセントニテヨク接合^兩ルノ浸入ヲ防ク
 又骨董子丸石、上ハコシクリトヤリ其上ハ、廿之七、四尺角厚二寸(四寸)
 花崗石ヲ以テ十ヤリ付立ト爲テ据付ク、以上花崗石ハ全部出湯産
 硬質モノヲ用エ、外ハサ狹野石ヲ用ユ、
 石塔、三号圖、ハ石、岡山県万成産花崗石、三角角高一尺六寸ヲ用ユ、
 如クハ五層石、石塔、大石花崗石、三角角高二尺一寸ヲ用ユ、
 唐草^ノハ爲シテ建立スルモノトス

石塔、四号圖、ハ石、岡山県万成産花崗石、三角角高二尺一寸ヲ用ユ、
 上二尺九寸五分角、高七寸、
 上用ト石塔、大石花崗石、三角角高二尺一寸ヲ用ユ、
 高七寸、上二尺九寸五分角、
 花立石、岡山県万成産花崗石ヲ用ヒ、定紋ヲ浮彫ル爲ス
 納骨順序、花立石ヲ取除キ、敷石、子丸石ノ取手ニヨリテ板石ヲ
 一枚除キ、明治ニ四枚全部ヲ取除キ、階段石ヲ下リテ
 銅扉ヲ開キ、納骨ス、
 以上、
 十一行

○六月二日 神田下谷ヲ去ルニ始メ得テ同中ノ四
 五の改者ありテ了ル

一 法華經

八卷

宗淵の校刻に係る背面：宗淵の字
 類と校勘したるものを刻す校式
 美らるるか上ニハ背面の校勘ハ佛典の
 界の跡とするものあり、二三卷ハ宗淵
 自筆の誤謬あり又印記あり某
 寺に奉納の字を記す、この誤謬此
 經本ニハ大なる光彩を認め、宗
 淵も西^漢印集三卷を刻したる人ニ
 此の誤ある傳り、此經の校勘經々

此人の力量を証す

一 犬子集

校五冊

寛文のりしを重頼と徳寺の明和句集を古例書として丸くびりしものあり、稀親に属するもの今に價ありし、此者七十五のりし婚小

一 幸雄古言記四集

一冊

一 丹鶴回謔

一冊

一 集古戸隠子繪様圖

一冊

三行回謔中一第一第二、特に誰と要せしが幸雄回集に染筆を模写し、この丹鶴回謔の紋柄とあ

つめたるものあり、此等の二書今に價ありし、第一三の宮をいふ幅二尺四五寸の大本也、古繪本をいふ戸隠子の畫や紋柄を模写し、この宮柄、彩色あり、考古の料とすまを得べし

一本 龍寺大繪圖

一冊

寶曆十一年、八文字屋八左衛門の版、東六條東本龍寺の繪圖あり、本寺の巨細をあらわす外、附近殊に枳壳殿の庭園を圍す不謂なる間、處を布庭と稱するもの也、寺の前而

こ不井集人 粟津大工の門流部々下河
大巻の其他寺役坊有、此迄今と去
異し

一新造回景

一冊

天の版山東系流が物を見まを例の滑
秋分を弄し、このま也、高橋の滑秋分大
ハ天あるん名物の見ま他人及んま
才あり此者、類するま方他、三四
あり皆る人を物かするぬあ、京
倚が滑秋分、ま外、西才ある
が故と思ひ、此者此流のこの内に
尤も稀観のこの也

一 此者詩史

二冊

此者畫乘要略著者白井華陽の字吉
こか、首尾、著湯の印記あり又巻
末

嘉永三年庚戌正月書

七十八齡華陽老植

とあり極めて、此年の字吉と元内、も細
言力あり、華陽の郷人、つき、贈る、架す
ニ存す

○余の著述流布の状況ハ別紙のことし、十四年十月
と本年三月迄の科集とす

六月四日記

市島謙吉様

大正 15 年 5 月 21 日

貴適之段奉賀候陳者御 述之書籍賣上部數ニ
高料下記ノ通リ差出申候間御查收被成度候

計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印 割	稅 合	印稅合計
自 14 年 10 月 至 15 年 3 月	76	200	15200	12		1824
自 年 月 至 " 年 " 月	563	230	29490	"	"	155388
自 年 月 至 " 年 " 月	168	230	38640	"	"	46368
自 年 月 至 " 年 " 月	239	"	54970	"	"	65964
自 年 月 至 " 年 " 月	1311	280	367080	"	"	440496
自 年 月 至 年 月						
自 年 月 至 年 月						
自 年 月 至 年 月						
自 年 月 至 年 月						
自 年 月 至 年 月						72646
自 年 月 至 年 月						20000

稅 批 年 在 前 年 十 月 十 日 印 算 免

市島謙吉様

大正 15 年 5 月 31 日

拜啓愈々御清適之段奉賀候陳者御 述之書籍賣上部數ニ
對スル御原稿料下記ノ通り差出申候間御查收被成度候

書名	計算年月	賣上部數	定價	定價合計	印刷	稅合	印稅合計
蟹の泡	自 14 年 10 月 至 15 年 3 月	76	200	15200	12		1824
大隈侯言行	自 年 月 至 年 月	563	230	29490	"		155388
藝苑一夕話	自 年 月 至 年 月	168	230	38640	"		46368
" 下	自 年 月 至 年 月	239	"	54970	"		65964
頼山陽	自 年 月 至 年 月	1311	280	367080	"		440496
	自 年 月 至 年 月						
	自 年 月 至 年 月						
	自 年 月 至 年 月						
	自 年 月 至 年 月						
	自 年 月 至 年 月						72646
上記原稿料印稅	自 14 年 10 月 至 15 年 3 月						
前払	自 年 月 至 年 月						20000
新刊原稿料	自 年 月 至 年 月						52646
	自 年 月 至 年 月						
	自 年 月 至 年 月						
合計							72646



印稅計算月 自十月 至三月 賣上ニ對シテハ五月ニ支拂 自四月 至九月 賣上ニ對シテハ十一月支拂
追テ初版又ハ大訂正ノ場合ニ限リ 壹百部ヲ新聞社雜誌社 其他ニ賣弘メノ爲メ贈呈用トシテ製本高ノ中ヨリ差引キ 計算候ニ付 右御了承願上候

早稻田大學出版部

○御室に於ける余が餅三昧の珍らうかしくぬことさう但に
 年夫いと敷を衰へたるの珍をたまき歎息の事新島田に
 仆ちきと日高初日地に一宿を勤す西條の威家
 丹其原平一初島田に返り来り佛子終つて余を
 拉して中居く侍上停車場に着るの刻而志きり
 此家今か家と舊あり松月庵に入らぬと先命
 すさるる此家の祖父江戸の人此地に來り割
 豆の業を営み壽司を心をも得意としまし
 屋と通稱す余が東京に在りし時此家の祖父
 此地の時東京に上り余此家あるも此家來

こと甚に稀なり前年高田橋士と後夜に來
 りし時此家も衆と會するを雖も廿數年前
 也余西條の威家ニ在りし時此家と橋あり入つて
 飲酒の候を得たりし今次初めに其候を得たり
 夫婦出むるも酒を飲して其候を歎す余纏
 頭と眞の橋夫婦有難絶命の命を陳し特にお
 の調理と為す多くの校書しと列す皆生面也
 余感興しけり僅し杯と爲るも忙しし念と故
 の美醜を論するも違ふも也此後丹其の家
 校宿時改に十二時と出れし翌朝起きを榻を
 仰け伏し餅三昧の扁額を掲ぐ室を仰り母
 なる毎に寝るも此家初めを思ふも

余ひとり失笑して曰く北畠余が腹をこぼすものよ
ろろ美余と欲ん特に之れを揚ぐるかと主人に問へ
曰く醉臥せし前代西成の別荘と云ふと
い非河つたもと書と能くし六酒量あり醉臥せ
の難あり怪しむと密をす某者市河寛高也
或いらく北畠を得たか故に取て出づと云ふ
未れ何んか是を知らざるや

余北行新沼に入ると直に物原を動き新沼の諸友
路を新沼へ出んことをせとあり新築の新沼社
を一説の約あり頼ち羽音丹兵衛を辭して行く新沼
の處余に授け給ふ午後一時半過ぎ干浦をこき
いまい干路を喫せ給ふ一二友人の来つて錫原屋に付て

とすこのあり、曰く五時過ぎん友人今も君を逢ふと、
余云く往因●を煩す●こと敢て望むと云ふと但れ君
と在り行き直に一杯を傾けんと、杉井と在り列り特
魁と菓とを下物として飲む此の二つのもろろ湯を
とする也、追て往因列り、小室亦報する然り
則ち廣生女と轉す甲乙丙丁戊己、親友多
く来り今も、故も未迄に來り活熱面より、思余の新沼
を喜ぶい友人の酒次議論せたること、故の客に當り
先杜に倚り湯衣の差なきも存り、彼等、願ふ余と在り
ふも如く誠意すらあるは、余亦実布のあるの思
を為ていさるる、余始め酒のや、苦味あるを、厚く白麴
を呼べの思り列り、余もい快然甜飲を辭せ給ふ

酒中扇子数握を流し字を流しよあり、余漫りよ
酒後を録す、里多坊未だ頭先白し曰く借る多因中
飯来し曰くお花物傳誦、曰く評後心積漸微
く最難忘要最難言、曰く情る寄情伝と妓多
之れを取、感具筆の動く、他あり必す七巧拙を
伺はる也、金夜十時、美人と、他樓と、藉飲えんとす
このあり、余東道、紅梅と、格、此家舊友、縁あり
の故を以つて新酒に入る、毎に潤切する能はる、二三子と
又飲む、特に禽肉を命し、佳而す、亦悪しからざる、
既して十二時を過ぎ、坐客皆散す、一妓ひとり留り、
酒を備く、春林富み容也、余こと、温藉、毫生
表氣の風とをよまう、こが、樓樓婦、未り、臥をす

す、余曰く老夫此世を因あるを欲せし、妓嬈然曰く
辞す、莫九客の醉代を護えんと、余曰く卿、吾人、評
する情あり、吾れ是こと、更に佳而しと云ふ、旅舎に由へ
ん、既して三時を過く
翌朝早く旅舎に訪ひ来り、このあり、糖代不足の故を以つ
て辞する、然るも起きて、應接す、是に、来り、評あり、このあり
十時、新の酒、社、の、余、酒、臨り、宿醉、晴、酒を
思ふ、偶に三友人の来り、七余を、行、形、事、付、えんとする、この
あり、即ち、亦、内、く、時、十二時、此、身、危、子、井、河、の、飲、後、
あり、日、中、飲、む、殊、に、佳、を、多、し、此、夜、の、宴、に、漏、ん、
友人、二三、来り、又、此、の、余、を、評、ふ、人、来り、
友、人、
也、亦、今、す、校、筆、中、に、此、飲、る、女、を、来、り、能、は、る、し、この

別に余連日酒に横を^此研を^此度自^此せり、押妓梅千の^此熱
酒を注ぎ^此供す、是の^此研を^此集せし^此あるの法^此を^此云^此ん
あり、三四杯^此を^此果^此して^此研を^此度^此し^此陶^此代^此味^此を^此云^此ん
す^此詠^此詠^此を^此集^此し^此妓^此を^此論^此し^此口^此性^此に^此潤^此房^此の^此す^此す^此及^此ぶ
半^此の^此後^此倒^此時^此の^此移^此る^此を^此知^此ら^此ず^此余^此を^此多^此く^此時^此の^此汽^此車
に^此投^此し^此ゆ^此京^此せん^此を^此送^此る^此余^此皆^此止^此り^此余^此は^此行^此新^此芝
の^此墳^此墓^此を^此又^此人^此が^此為^此り^此未^此だ^此墳^此墓^此の^此成^此り^此と^此も^此こ^此ん^此入
こ^此未^此だ^此と^此笑^此ふ^此衆^此を^此引^此け^此り^此旅^此舎^此に^此宿^此り^此行李
を^此納^此へ^此ぬ^此皇^此停^此在^此海^此に^此お^此り^此る^此船^此尾^此に^此て^此行^此形^此の一
坐^此階^此停^此在^此海^此に^此来^此り^此送^此る^此外^此に^此校^此友^此の^此妻^此一^此二^此あり
校^此書^此七^此数^此筆^此 東^此野^此東^此未^此だ^此此^此地^此の^此風^此俗^此も^此先^此の
宮^此中^此の^此書^此を^此看^此る^此こ^此人^此見^此て^此異^此ま^此さ^此る^此也^此 由^此京^此後^此三^此日

閑を得て此記を^此心^此の^此六月^此四^此日
日^此雨^此白^此伊^此集^此郡^此の^此七月^此特^此大^此強^此とい^此ふ^此の^此お^此と^此う
七^此ん^此の^此こ^此と^此が^此お^此て^此の^此と^此娘^此が^此ふ^此り^此か^此何^此も^此取^此つ^此て
見^此ると^此大^此隈^此彦^此の^此回^此民^此舞^此の^此こ^此と^此が^此載^此り^此て^此ある^此草
者^此は^此全^此死^此知^此ら^此ぬ^此人^此の^此あ^此り^此又^此特^此に^此自^此命^此を^此汚^此し^此未^此だ^此つ^此て
歩^此へ^此れ^此る^此人^此が^此お^此と^此う^此大^此隈^此彦^此死^此去^此の^此日^此侯^此の^此玄^此関
先^此に^此多^此敷^此の^此新^此々^此記^此者^此を^此集^此め^此て^此余^此が^此嘉^此三^此を^此
表^此し^此て^此時^此折^此り^此其^此由^此を^此お^此れ^此一^此人^此と^此い^此ふ^此者^此い^此て^此ある^此
實^此に^此記^此す^此未^此だ^此時^此自^此命^此の^此言^此つ^此こ^此と^此い^此ふ^此者^此あ^此る^此陰^此を^此
自^此命^此の^此七^此日^此息^此奮^此り^此て^此お^此れ^此の^此時^此に^此政府^此改^此政^此の^此派
氣^此も^此あ^此つ^此て^此思^此ふ^此が^此中^此に^此ま^此り^此或^此派^此と^此い^此ふ^此者^此
つ^此て^此見^此へ^此る^此地^此の^此事^此者^此の^此こ^此と^此を^此い^此ふ^此其^此一^此人^此が^此あ^此る^此

大正十一年一月十日、世界的偉人大隈重信が太陽が地平線の彼方へ燦として没し去る隙に逝つた時、天下は老も若きも一様にその死を悼んだ。



早稲田の侯邸では、朝野の名士が靈柩を圍んでゐた。誰云ふとなく、國葬だ、國葬だと云ふ噂が傳へられる。全國の新聞記者通信員は、この名譽ある國葬を全國民に報道すべく一室に待ち構へてゐた。もう國葬の勅使が立つに違ひない。政府からの通達があるに違ひないと待ち懸けてゐたのは、強ち早稲田一派の期待のみではなかつたらう、むしろ全國民一致の期待であつた。二日は経過しても何等の音沙汰

もない、彼等は既に待ち疲れた。この時、一堂に集つた新聞記者をぐるりと見廻し、極めて悲痛な聲で「諸君！」と叫んだものがある。見れば、故侯の懐刀として四十有餘年、全身を捧げて侯を護つた春城市島謙吉氏であつた。

熱誠の人市島春城

高田三郎

あれを思ひ之を思ひ春城氏はこの時まで沈思してゐたが、抑へんとしても抑へることの出来ない熱火の情熱はこの時に迸つたのである。一言一句故侯を憶ふ烈々の切言、居並ぶ新聞記者の面上には、感激の血が燃えた。筆を持つ彼等の手はわな／＼と震えた。

最後に春城氏は一段と聲を張り上げて云つた。「故侯は國民の父である。此慈父を神の御手に返すの方法は、只一つ吾等國民の手によつてなされるべきである。宜しく國民葬となすべきである……」

國民葬、國民葬、何と力強い言葉ではないか。次の日の日本全國の新聞紙に現はれ、特大號活字の、大隈侯國民葬の六字が、全國民の感激の眼にさう映つたか。それは實に國民の聲に合致した絶句であつた。

六月五日記

○六月七日 此の左の数字を辨ふ。

一 古書白紙回言

四冊

此書種子に散見する醫言を採聚し、多分の解を附し、その文化十年東洞の好信天の序あり、匡吾とて親人とし、その言多語、能く見こへべきこと也

一 天到地怒圖

二冊

海在陸海李龍眠の著に倣ふて心づるよ、海と陸とを以て撰刻

十二行

この書は倣ふ所傳、水滸、其の傑の圖あり、卷末に全書木葉の印記あり、木葉木の跋あり、卷首多胡送者の序あり、天保六年江戸板田官舎に読すとあり、善色此者を海と陸とを以て撰くと云ふの誤り、似たり、前年下巻一冊を贈ふ、今完本を得たり、其の誤りへし、白紙大木幅表紙、稀靨の色也

一 芥子園畫傳

全一冊

此方刻年と日缺けとも寛永らとも新
くき調子あり十一頁畫を揮出
七帖の味揃まへし、華あるか寛文
頃の版をん、善し珍重しあるを
也

○國朝寶鑑

二十八冊

大正十五年六月十日購之此日李王四集之日
也李王韓四最後之主權者也日本日偶然
之れと婚ふ善し之の像也二以つる李王四
集の紀念とすまへし

此方数枚あり冊数同しめらるる二十八冊
本ハ最後の増補をとり巻尾尾に迄

十二行

吹破しなる李王定用の名にあり
一時朝鮮本價高き、余公四方刊の
會に此書を刊し時原本の價六兩四
〇ろろしことを記憶す今、價其此れ
低下して四十六兩也

○明治十二年に創刊のまのり多ハ一萬四千部
し此中時、怪も高の事妻の此の比陸のあり、且つ新
支條例が前もきく改定えて後刻を極め比陸にあり
此、多んう為り入種々の面創か生して多くの編輯
者を固固とさう自分も亦に入獄の身とさうつれ、南
時此は多の使命ハ位紙紙を私設経をよとす

今在つた。在社一年ハ分りあつた。初めの祝儀の
 由が昔号をかき終つた。一葉四千部を發行する。就て
 思ひ出たのさうさうい。此の旧社の社長が追憶話を
 とふに、大暇をとり記す。余の押書元
 を掲載せんとす。但して、昔年如雲の四字紙
 を送つた。左は、初号の末に社長を七余の
 名が乗つてゐる。思ひ出深い。あつた。六月十日に
 〇雅徳「美の四」の爲め、茶を道すらん。故
 味しの一信を考して定す。こんと同しことを
 年某新号に投稿し、今度今度を聊に
 愛しく書きかんとおぼす。いふを免ふ。更増
 補して他の出版の地華。中、ねめんことを助す

高田新聞
 新潟縣中頸城郡高田吳取町十一番地

社 長	假編輯長	印刷長
市島 謙吉	設樂 正吉	竹村 良貞

日 曆 二 月 二 十 四 日 〇 五 〇 〇 〇
 日 風 雪
 料、都々前金御掛被下度候
 第一號は現在の半頁大頁にて明治十六年四月一日(曜日)に發刊された(右)は其の第一
 頁(左)は第四頁の末尾、社長(主筆)は市島謙吉氏、假編輯長は設樂正吉氏、印刷長は竹村
 良貞氏で置置は吳取町十一番地に於つた

高田新聞第壹號
高田新聞

(Faded text in the left column of the newspaper page)	(Faded text in the right column of the newspaper page)
---	--

○今の坊子と過る漢方醫書の臨集を得たり、
未だ古の取味を感し、往し購ふに後して醫書も
等と天地を異するも、かゝる時、具あることを
見ず、但し、専門の醫書のみ、後あることを疑せり、
臨集の、諸るもの、を離れ、その、さう、以來、
桂林書局と題し、口書、刻を、試みる、もの、あり、
扱ふ、所の、古、久張り、専門を、や、外人、なる、臨集、の
類、さう、余と、取味を、同、ふ、する、もの、を、在、の、か、を、
又、へ、さう、さう、今の、と、好、む、もの、

杏林内省録

六冊

こゝに医家泡業中、路下と為す、その、さう、備
前、山、結、方、惟、略、義、え、の、偏、下、を、主、し、天、保、丙

中、京、都、を、た、て、出、版、さ、る、卷、者、標、題、に、官、市、里
部、を、分、つ、て、三、つ、論、と、さ、す、と、あ、う、て、三、種、の、医、の、心、得
を、著、し、し、る、もの、を、**医界の風俗**を、叙、す、
七、あ、く、さ、お、か、し、ろ、き、ち、さ、う、**口、中、今、地、行、の**
醫、田、志を、主、と、さ、い、ぶ、よ、あ、う、**逸、つ、を、價、云、こ、不、康**
也、北、者、の、價、二十、三、月、さ、 **六月、十一、日、録**

○**臨集、雄、赤**と、名、行、す、稱、誤、社、の、記、有、さ、る、余、が、
年、時、代、演、説、を、習、ふ、い、め、け、し、る、か、甚、心、の、語、を、
人、と、求、め、て、修、し、全、一、つ、橋、大、の、時、代、回、室、と、せ、
今、こ、い、ふ、合、を、設、け、互、ひ、演、説、を、試、み、し、さ、ま、ま、
か、せ、し、た、こ、と、を、語、り、高、時、の、出、生、の、語、を、演、説、を、
辨、る、今、の、さ、の、生、の、異、用、さ、う、さ、う、及、ん、ず、何、ん、ぞ

ベルナルド・ジョン・ベッテルハイム (Bernard John Bettelheim) 畧歴

- ▲西歴一八一一年六月、匈牙利ブレスブルヒ(現チェッコ・スロヴァキア)に生る
- ▲一八三六年九月、伊太利パデヴァ大學より醫學博士を授けらる
- ▲メヘメット・アリ(埃及現王室の祖)の軍艦に軍醫長となる
- ▲土耳其の陸軍聯隊軍醫長となる
- ▲一人を醫するよりも萬人を醫するの大なるを悟るや、倫敦に來り、基督教を修め、リヴィングストン(有名なる阿弗利加布教兼探検家)と同窓の友となり、一は阿弗利加に入り、一は琉球に到る
- ▲一八四五年九月、帆船にて英國出帆、翌四六年五月二日、即ち本年より正八十年前に琉球に上陸す(日本弘化三年四月六日)
- ▲ベッテルハイムはベッテルの支那音伯德令に依り自から伯德令と稱へ、今の沖繩縣那覇市波ノ上護國寺に事實上禁錮せらるゝこと九年、其間琉球政府及び在番の薩摩役人より有らゆる手段を以て『苦迫』せられ、一般人民よりも石まで投げられ街の上に打ち倒れたることありしにかゝわらず、施藥、診察、治療一日も止めず、又種痘術をも行ひたり。又琉球語を以て基督聖典を翻譯せり、琉球の文學者が其の『琉球語は嘗て印刷せられたるもの、中、至純至美……言語の美なるに驚けり』と記せるを以ても亦た其の文學上の價値を知るに足るべし、此書今や世界希觀の一となり、本邦に現存するもの五冊(?)
- ▲米國ベルリ艦隊の琉球に來るや、其間に斡旋し、琉米條約成る、ベルリ提督より銀製の大洋盃を贈る
- ▲琉球譯聖典の淨書成るや、之を印刷に附せんとし、米國艦隊に便乘して琉球を去る、時に安政元年
- ▲米國に在留中、南北戦亂起るや、イリノイス州義勇軍の軍醫となり、ウィックスバーグの大劇戦に参加せり
- ▲米國南北戦亂の後、米國にて琉球及日本の紹介に努め、一八七〇年二月九日(明治三年)ミズーリ州アルースフィールドに死去す、行年五十九

以上の如くベッテルハイム博士は匈牙利、チェッコ・スロヴァキア、埃地利、伊太利、土耳其、希臘、英吉利、支那、米國、琉球(日本)の十國にそれ〴〵因縁あるを以て、茲に博士琉球上陸の八十周年を期とし、其の九年間寓居となせし沖繩縣那覇市波ノ上に地を相し、博士を徳とする十國よりの石を以て土臺となし、米國よりの記念碑を其の上に建つることとなりしなり

閑院宮殿下より右記念碑に生木一對御下賜、小村侯爵、澁澤子爵、三井男爵より各々生木一對、文明協會々長大隈侯爵、雨潤會代表陸奥伯爵より各々生木一對寄贈

ベッテルハイム博士は那覇市波ノ上に九年間居りました。波ノ上は珊瑚礁の斷崖で、白浪岩角に碎け、かの王夢樓(清朝第一等の書家)が『石筍崖』と稱へ、月の夕に琴の音を聴き、鯨人如解聽。清淚濕氷綃』と千古清妙の句を得た處であります

ベッテルハイム博士は二頭の英吉利犬をつれて琉球に來られました。まことに忠實なる犬どもで、入つては主公の爲めに其の寓所を衛り、出ては主公に隨伴し、群れ集る琉球人の垢罵迫害を睨みつけました。そこで琉球人は博士と犬とを附物とし、更に又當時琉球にては眼鏡なるものは老人が爪を切る外には用ひずと思ひたるに、博士が居常これを其の眼にかけるより、博士をインガンチャウと呼びました、『インガンチャウ』とは『犬眼鏡』の琉球音で、嘲笑の語となり、罵言の徵象となり、遂に畜生と同意味の呪ヒの言葉となりました。「犬眼鏡之歌」の惡詩があります、惡詩も惡々詩ですから十分十二分の御斧正を願ひます

犬眼鏡之歌

犬眼鏡。犬眼鏡。恰好眼鏡爲名犬爲姓。大覺朗然絶是非。呼犬喚豚任嘲評。私期穢土一日功。却勝百年之脩行。勇猛精進大音聲。究竟肯不惜身命。面壁九年古所聞。東方今見西方聖。醫而非醫聖而醫。匈國博士伯德令。我今尋迹來流虬。石筍崖頭攀石磴。攀到絶頂浩浩歌。天颺颯至波欲迸。歌聲挾波感魚龍。又訝鯨人出水聽。

五月十八日

那覇朝日

志賀重昂草

〇此の賤心得なる緒方惟勝の本林内者六冊
 と、後後翻撰候暇に讀み、おもしろく感心し
 リ、大板屋家の池部と兼方と関する、ふま
 流方兼副を外ん、ちから病家、おもしろく心得の
 みを事實をおもしろく奉けし説き、いふあり
 某醫者の著、いふ、醫戒といふ一書、家抱い
 たり、え七ちから病家、おもしろく用意を細い、
 まうを、點紙し、得る箇條のあら、いふ、内者
 候のこしく、詳悉の、ちから、此方、友醫
 市野回里醫國の三門、分ち、各醫國の、ちを二
 冊つ、いふ奉けたり、ち、市里三醫、おのつ、ち、境
 遇を異、い、病家の地位を異、い、か、
 十二行

其の用意も、おの、ちから、異、い、ち、
 ち、を、引、き、あ、ん、ち、を、必、し、
 目、睹、し、な、り、申、し、笑、ひ、の、
 興、を、と、こ、う、い、ふ、あ、り、
 ち、及、び、区、お、の、こ、と、
 〇、因、者、ハ、漢、方、醫、術、と、
 〇、が、醫、術、ハ、一、ち、
 〇、ち、を、ん、と、病、家、に、
 〇、ち、を、ん、と、但、以、時、
 〇、此、方、の、用、意、も、
 〇、異、曰、ハ、唯、だ、こ、ん、
 〇、ち、と、ち、を、ん、と、也、
 〇、漢、方、醫、術、の、家、の、
 〇、と、し、云、く、ハ、

陳腐の積ありて遂に糸と為す如きハ珠玉を磨き埃
ニ垂棄するに如きを惜むべき也

北有を羨りて先づ感ずることハ醫家七五九のつら
業を多しこととう、動もすんハ毒薬を潤割するの瘡
痛を受く後難と恐るることハ毒薬と難しん死
とてふことを恐るることあるも、さる胡麻代しの利
かたる所なきありて、皮をさるハ一刀ニ斬り殺せらるゝ
との危険もあり、此毒の奥方との侍遊のつら
らせ、此の毒家ハ密使の役を専らあることと見ゆ
る密使ハ名家ハ秘を乃至正統を以て依り身を果す
の跡子あり、相謝儀ハ時を待し、並ぬるか人傳え
ともつらきことの一と、或ハ死候の命を乞ふに

重役の政論向の誦演を傍聴すること七つらきこと
役人の君命とあるを以て、扱ひ又得とせんも斯る
か吐くあはハ評議各々沈黙するが自らの執り
終ハ其の逆懸けしことあるも、重役共別
ニ悪妻とて黙するも、あは、今派の次方を曲
げて君公と報せしことを憚るも、奥方の託を
得たる返が往々不義の言ひかけを、回信するも、
いさゝか交ること少くあり、然して、注房に仕へる醫
ハ種々の儀礼に拘りて、自信を行ふ能はず、激刺
の効ある所なきも、多く用ある所なきも、為る沈滞
へき志を、救ふ所なきも、貴族級は多くあり、此の
階級に仕へる返、日々赤つらからずとせず

貴族階級に在るは世に自家の本業に居せ
て居ることを得ぬ。こゝろつらき
ことあり、某藩某侯の公子雷を怒るゝことあり
其の治方を問ひ、侍醫の扱方雷等のあつた米砂
糖を産に撒いて雷を笑と稱して自から之んを吹らむ
がふも世にせしめて奥かをたりといふことをき湯粉を産
むある。或は侍醫侍醫に米を炊くことを命し其の成
りたるを見せ候やづから斯くすべしと教へん。是亦雨
一なるもの後心あり侍醫を考へ、所候の侍医に
侍しをるゝもの故に侍医の考を考へ候も、一考するに
是れを受け候とせぬは、動もするといふ事もある
是れと難問を改つこととあり、或は隠し花を産とせ

いふこととあるも、厄介なるものあり、いふ事かつら
きことの内、考ふる事

医のつらき、狂亂の考家を治め、危候を考ふこととあり、
刀を振いて医に迫り、或は侍医の紙瓶の湯脈湯
を頭上にブチマカスものことあり、婦人の陰部を察
することと難儀の一なり、婦人の羞む向外を露かす
を告げせしむるが例あり、去る患者あり、是の家に入る
に面部を掩ひあるが秘訣ありとあり、高床危候を
する婦人が、親に女控批き、ことあり、女
控、意に不測の災を醸す、事あり、事あり、事あり
曰候也
患者に對し、言を慎み、事あり、事あり、事あり、事あり

彼士妃の思いとおあしと早⁵なるの家、あまを悔
て遊こつ人、成りしとかや、活と計略を運、難つこ
勝と、登るも、頁といすま、か、故に、女、斯、計、ひし、也、却
今の世、こ、門、戸、を、結、る、ま、じ、他、邦、の、運、来、を、難、を、也
時、に、此、の、留、を、結、む、へ、し、と

●内、有、秘、の、書、者、借、と、取、渡、を、弄、す、運、来、の、玄、術、を
成、部、に、聖、へ、さ、る、思、ふ、云、く、今、の、流、行、運、の、指、へ、力、成、部
の、こ、と、一、栗、の、木、の、駒、寄、り、逆、木、を、寄、心、出、し、聖、に、換、て
出、格、子、を、附、け、有、石、垣、を、擬、て、八、枚、の、腰、板、を、懸、次、し
徹、砲、穴、に、準、し、て、拍、見、窓、を、開、け、堀、に、打、ぬ、て、換、へ、裏
門、を、も、隠、病、に、を、設、け、火、矢、防、ぎ、の、水、溜、を、内、庭、に
置、き、時、計、の、御、書、に、お、回、の、鏡、の、如、く、堂、子、の、額、を、懸、し

この巖指上る、彷彿、多、大門、玄、関、の、又、宮、の、開、く、は、孔
の、か、つ、り、り、り、街、亭、の、城、の、如、く、萬、年、に、換、る、鳥、籠、を
大火、鉢、に、燃、し、奥、の、百、の、金、の、音、に、現、る、の、ま、る、と、受、来
ふ、故、扇、應、疾、教、引、卒、し、と、室、の、来、る、教、多、の、教、
七、才、し、は、増、す、梅、か、と、心、中、に、感、を、ぬ、あ、る、一、見、得、二
陣、と、負、う、侍、百、無、能、出、来、る、大、先、生、の、涙、古、い、客、
我、子、賣、る、あ、る、さ、ん、が、是、れ、本、張、儀、の、如、く、ま、を、か、る、る
地、教、者、人、も、此、運、の、ま、か、今、の、世、に、我、か、一、命、を、託、あ
る、る、一、海、金、を、其、殺、さ、ん、ら、う、も、何、を、恨、ま、ん、不、厭、と
思、ひ、た、か、さ、る、
奸、謀、云、く、

云、直、瀬、乃、三、と、後、藤、原、長、山、の、名、も、云、く、道、三、又、常
と、肩、輿、つ、ま、と、登、城、の、侍、余、上、つ、ま、と、み、九、條、の、四、奴、子、痛

解七柱子の端を把て履了都道三天從焉に切控
せしと言ひんやをも不能切故轡をこし下り手つから
知つてあまをさうして物書し入浴し神座に登城有し
多都るく満しかは時の品民人切り道三と稱せし
しより此是生に御辰附辰斗目を賜りしを以て官道
総に越斗目を著同御免を賜んやや又海有て
度道の言あぬ御免の道七越斗目を著す
みるんは是則道三又の致深し其以前ハ官道
無紋の白無垢衣浅黄無垢衣紫無垢衣十徳を
著せしや或又の法は後赤良山に携御家擬え
後衣を紫膝すを束袖結肩衣短刀を帯ひ御履を
着け御所文庫御の赤袴を從焉に持せ目奴子

替若履の持せを端家回勤せんと威儀在
るるや多し時の京平の供頭誤認し携御家の御
行と有り下乗し元廿五日午後九時一良山
こと知んや多し御免の道三又の致深し其以前ハ官道
今ありし道の御免を著同御免を賜んやや又海有て
七紫無垢衣紫膝すを束袖結肩衣短刀を帯ひ御履を
着せしや或又の法は後赤良山に携御家擬え
後衣を紫膝すを束袖結肩衣短刀を帯ひ御履を
着け御所文庫御の赤袴を從焉に持せ目奴子
若しの名道三と稱せしは御免を著同御免を賜んやや又海有て
たの如きんや一より山脇吉判に聞す吉判三代
の天子に奉任し為め殿上杖の御免ありし家

ありあはれ今例無きこと也元祿の頃京の寺町に於て
寺の如きありて夢みくく本寺の如き先づ思ふを道
日病ありて山陽道に可治と夢又て受以んを怪き
ことし其後指おとすか其意同夢を支改の位は
一統に見て寺の集會す一語の使僧を山陽家
一其より先併て其をゆふ先生も亦前又其市所
ありて怪しきこと思ひなると使僧来て言ふ
今も許介しけん使僧に勤む言ふやう上古に未
存漢の不知佛を治療せし人を以て保し其
夢の感するから怪言と多難言を以て珍し
かゝり帯の病人の扱ひ一七言物語の巻と約
既て其を道き沐浴に扱ひ乾き治り初め引か

由神への佛像の手を珍しむる脈の可有理なり眼
を定めて孰視あるが胸の色に木の縁目ある如爪を入
てみらんしに脈を尋く如く左右に多ん胸腹の中は別
木を用え五臓六腑を二二分り糸一上へ約るん
一か其を切んて下に着て其の内を咽喉の高をえ
しん糸一糸一糸一字をぬく又佛の折釘あり其
際六腑を知り設る見え生れありて如木の病葉
は是より其脈を其位互の如く約んをえは清
浄な糸を出さんよと云ふに衆僧先刻りし
糸を吐き各りしかるをえと北山系に秋房文主秋房
主勤一人の位を胸内に五臓六腑を備え而中
二天智系神玉の六字をえ備ありて少侍の

佛四河を遊んで 洲をえんくことなきを 釣糸の女あり
油生さると狼狽の折あるを信者の西陣糸屋
勤十印矢より合せ替るるをすては 糸の私手物をも
奉らむと是も古き物馬の糸の製成を先を以て
位立を定めて釣糸のめし時の人々に音異の思
を多し世世の古人は 胎息するこころなり

此者亦レ一ホルトと山陽に就レ一四の各の事と
記す云く山陽西澤にレ一ホルトと東都に從來
の時東都河原所の流終に澤端す、菌科のまじり
を益を治ふ者多し其中に湯浅大和なる者あり
レ一ホルト其人の國を長とすことを以て記すを以
て本邦の事と河の湯浅を以て記すを以て神好

連綿に皇帝の位を継ぐは吳邦の如く朝秦慕漢
の夏より萬民奉戴して倫理の正きもの若し四
以一望のまじり西洋の窮理の大回と貴へしもの不毛の
地多き故論するも生るる又吾回を小玉と云ふ大
るる河ありて昔に前出委土郡の郡守入唐せ
し故中書卿といふこと思ふこと漢國文集と記す
り是に相解知代に未中書卿といふ回を以てし
怪なり天津日津の神寶の漢土傳回の玉蘭玉と
同りの論ありしものと若し譯すべしといふ
ルト大に感得し程々物に多し可憐此人生は
脱してか文才に誇り頼山陽が青し物なるを
を自ら河州と名を名をのまると示す、又入取て取

次てんか自合指のそ頼の家と云ん山陽七をその少い
不出逢るう常と望思男女の差あさうへくお
しと神及のそを統くお人比と狂也と云底ききし
すんとも神乃と松白川家ののが及このそし是年
京南宇治田原をそ邪神と追流し以年下加賀
まそ福ありの想を結つる此のそ丸巻るんを例の大
言也として靈(不信)北人の田原をそ愛するの賀茂の
季子宿ありと余二人の又也

諸君の陰をこのとき一説を載す云く、一大法疾酒家
ろそ痔疾を患ひて大便難く、廁に上りぬる時を
移しおふと困る新に便器を造らせしむ其形神慮
の如く黒杉休糧干と没け二杠子を造り中央の下

の便器を造り酒室中へ流便器ありて即便器を
呼ぶおし此器を侍女四と席上へ昇来り其器に
入て便しおふ身其器のにおいぬぬ柄の錦纏を下
の便器を不問ふとも愛後因ておを傾け酒室あり
まのここと其満の侍女に受けり是今も申す花
室か不問ふ因て便臣おが奉勅して造らるありし
らむ抑お掖言後魚刺をぬらうと也斯きことの
他、漏んすべしことを恐るおを侍女に侍女か
斯の奉後陰私を漏らふ河をそを余其返と
ふ未交を疎んず

昔しの名退任証横邊 ちうしことを後日一葉と曰く此本
の執政退任を撰ぶ武士も一信細謹を不棄るの退任決

一と出ることあり、如何と云はん、昔買圓手、冷人の任、
横道、うへに義に拘らざることと云はん、有馬涼及、八圍
其に耽つて一端、勅勅を多う有馬丹山、三四の娼婦
を購ひ、山陽東の先生、のり原、桔梗屋の花魁、奥州が
急意を三貼の薬、うへに金、万金の術を、贈りしと
言ひ、教を、さん、の、細、を、求、め、不、老、の、因、り、え
世を親しむ、緑の一世を、まじ、る、者、あり、の、情
史年、新、命、た、め、史、生、京、に、の、用、業、あり、し、す、其、源、の
ま、る、者、と、云、お、親、一、或、時、源、の、先、を、回、り、下、早、く、名、を
考、し、業、を、欲、せ、ハ、計、取、り、お、物、に、せ、ん、と、教、け、
ん、ハ、史、生、即、年、を、さ、る、内、庭、に、株、を、打、て、云、因、前、く

繫きつゝ、史生、の、史、生、の、京、に、の、用、業、あり、し、す、其、源、の
ま、る、者、と、云、お、親、一、或、時、源、の、先、を、回、り、下、早、く、名、を
考、し、業、を、欲、せ、ハ、計、取、り、お、物、に、せ、ん、と、教、け、
ん、ハ、史、生、即、年、を、さ、る、内、庭、に、株、を、打、て、云、因、前、く

法、不、見、の、物、し、て、史、生、の、一、頁、に、列、す、其、者、者、之、大
略、に、史、生、が、當、り、て、情、を、耽、り、し、る、を、告、白、し、殊
に、史、生、の、國、を、遊、行、す、を、奉、り、曰、く、余、が、こ、と、き、情、を、
二、癖、深、す、人、を、さ、り、し、其、道、の、源、を、究、ん、と、欲、せ、は、
昔、書、劉、毅、が、情、を、後、て、大、意、に、知、る、し、在、き、に、
む、つ、て、史、生、の、房、千、里、が、散、子、選、格、李、翱、が、
五、木、經、宋、の、程、大、昌、が、樗、蒲、行、殿、元、の、楊、維、
楨、が、除、紅、湯、等、を、関、す、ん、ハ、史、生、の、解、を、さ、る、也、と、云

元来西土旧俗の破家散財の術なりて中世より
本邦へ傳来し士農工商より此道に耽る
輩を多し少くハ人物をせしむ一即ち此の
得てハ失産亡命の礎ともなる所定なりき
わしく禁制し以てふ也因て此道に癖深する人
あるに速に異域の悪術邪法と畏怖して慎之
お多ん老く禁止すべし

此の先白の巻一大陸より、後序亦自家の故郷を
歴を歩け此を著しす所以の萬國を著す所云
ふといふ云々

前巻)亦諸本邦近世世變以来之秀者、如長高生
之著漫遊記也、益亦是也、其言云、性狂狷

不為郷曲客、又曰、血氣之盛未定、好貨色、後
遂絶飲博之類之交、為醫者之志始一矣、觀其
意、蓋性苦之不羈、一身之軟弱、萬感之所
為、若者書之所由也、何者乎、似余之今日
也、余故備舊醫書也、不幸切尖者、又又少親
戚見之、為相訓戒者、放縱不羈、惟其所為、
遂使交於無賴徒、恣耽声色、飲博漁獵、
廣所不為、大拓郷曲之途、云々

此書解人へてあるんハ言ハ難きもの多し、善し其の
故郷生活世知にありしもの改す者と謂ふべき歟
此の跡より其の若者ありしもの、六月十日誌

河竹黙阿彌は文化十三年二月三日江戸日本橋式部
小路に生る。本姓は吉村幼名を芳三郎といひ、父
は質渡世なりき。天保六年三月より五世鶴屋（孫
太郎）南北の門下勝蔵として市村座に出勤し、
同十四年河原崎座にて二世河竹新七を襲名し立作
者となり、明治十四年十一月新富座にて引退を披
露し黙阿彌と改め、同二十六年一月二十二日七十
八歳にて歿す。生涯に作る狂言、浄瑠璃約三百種
に上る。「火の用心」はもと明治二十五年森壽
に際して書きしもの、大正十二年の震災を免かれ
し目出度きいはれあるにより、友のすゝめにて任せ
上木復製せしものなり。（大正十五年四月河竹繁俊）

火の用心

七十七公羽

黙阿弥



河竹黙阿彌は文化十三年二月三日江戸日本橋式部
小路に生る。本姓は吉村幼名を芳三郎といひ、父
は實渡世なりき。天保六年三月より五世鶴屋(孫
太郎)南北の門下勝蔵とて市村座に出動し、
同十四年河原崎座にて二世河竹新七を襲名し立作

小野梓先生の長逝の約十九年一月十一日、享年僅かに
 廿五歳、今も七十年前に同じ佛取ある年、合む三十
 三歳の忌の追悼會を學士さんに催され、今日の中
 四十年の経た追悼會を辨知せられた、
 先生と交を厚ふ一人、私が其の四十年の追慕
 會に臨む。主として親しい真の感慨無量である。
 通例友人の忌の三十三年忌に臨み得ることは稀なる例
 である。況んや四十年といふは尤もや。下野先生は昇
 仙したるに、お節と先生とを尋ねると曰く、交を厚ふ一人、
 本天の創立の頃其の力のあつた云々、先生氏の三十
 三年忌、自分の懐いた時、七十三三年忌、今

得たよと思つた、同年輩の友人が相商の事天壽を
保つて歿したと云ふと其の三十三回忌に生夜の友人も多
く存存してゐるの筈である、倣ふに五十七歳で歿したとす
ると三十三回忌に身の同年輩の友人八十三才む
ありぬらうぬらう、先づ多く生夜の先來するの
である、況んや四十年曲と云ふと先づ七十七年敷
が増す、使はる五十七歳で歿したとすると同年輩の友
人に九十才むあるから生夜者が少く、少くも元
である、唯れ七十九才むを享年と云ふは、
の長考である、此れに早く歿せんぬらうぬらう、
四十才むまで死すや先生の三十五才むに於て歿したの
む、その三十三年忌や四十年忌に吾等が到りし

得た譯もある、まんと考へると吾等に向つての志を歎ま
るゝ免れぬものなり、父の早世を云ふに似て歿後せ
くるを得る、三十五才むといふ年、いふ時、
む、心算うにんかといふ時、
とと痛歎てぬらうぬらう

去る者、曰く、疎くといふ情の常、いふや、
逝く、四十年といふと、
ある、
懐か、
入腹、
不見解、

若きとき、自分から進んで年々先生を研究し、味
 味のつらさを感じ、生前に理解が出来なかったことが
 理解できる、其のつらさを感じ、おれ克が益々放れん、
 やうに感じ、先生の大人物、先生の固執、面目か自
 益と知んじ、つらさを感じ、別に今のやうにお
 かす、執念、増え、世の中、高も先生を思
 る、おれ何うも慕ひ、つらさを感じ、つらさを感じ、
 斯人を生かす、つらさを感じ、つらさを感じ、
 得た、つらさを感じ、つらさを感じ、

おれ先生の人物性格、つらさを感じ、つらさを感じ、
 得た、つらさを感じ、つらさを感じ、

因縁

等と先生の関係、此の早稲田大であつた、
 関係、つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、
 つらさを感じ、つらさを感じ、

人物を平して此の世の庶用をせしむるは、其の扱へ大隈
侯の割意や字の附けは開校せんは、而初の任言
ハ先生公やつれりある、建学の本上り先生也、大隈侯
の意を承けて先生に、どうぞとせまりは、ある、大隈
侯曰、早大の第一祖と云つて先生に、第二祖は、大隈
侯と云祖と云ふ先生に、副祖は、ある、
先生の、方の人柄は、あつたか、先生の、宿毛に生ん、勤王
家、即ちまといふ人と、親と方つた、先生の、其の、血統を、受
けて、精神家、は、あつた、氣、即ち、人、は、あつた、副祖、の
人、は、あつた、皆、あつた、カ、自ら、を、歎く、所、の、無つた、人、は、あ
つた、分、の、西、大、然、り、カ、國、の、所、の、無つた、人、は、あつた、勤、勉、努
力、の、人、は、あつた、奉、公、勤、王、の、厚、い、人、は、あつた、先生、の、高
後

平を、校、て、せん、が、漢、の、の、素、習、も、洋、の、の、英、の、を、外、國、に、お
び、法律、を、考、究、せん、は、カ、其、の、法律、の、状、師、と、し、て、法、廷、に、是
つ、の、法、を、お、ひ、ら、う、と、主、法、の、の、あ、り、は、先生、の、法律、の、洋、を
考、究、し、し、側、ら、賦、政、の、を、せん、ん、ん、先生、が、主、法、の、の、
こ、建、立、の、深、き、民法、之、骨、の、若、も、見、ん、は、疑、つ、ら
ぬ、先生、の、賦、政、の、事、は、この、の、あ、つた、こと、の、明、次、賦、政
史、や、其、の、他、の、海、に、関、する、其、折、の、若、心、か、の、か、こ、示、し
て、ある、の、先生、の、志、の、政治、に、在、つた、先生、の、政治家、の、
入、必須、の、の、の、問、を、ま、し、し、て、依、り、め、ん、ん、先生、の、英、國、典
型、の、政治家、の、資、質、を、備、へ、た、先生、は、生、前、既、に、大
臣、の、器、を、あ、つた、先生、の、風、采、態度、其、後、
其、氣、品、操、時、の、立、憲、大、臣、たる、何、者、も、不、備

を感くまうつに、何人か大臣なすべき資格の具備を思
め、先生の自らの期する所を説くことありと思
はるが、但し一の剛如しとの健康ありつて君の
天性を賦弱が平素も健康がすくなく、往々病持
あつたまゝして遂に不況の病を得て、豪邁不屈先生
の如きもの打落つことが出来ず三十九の歳といふ
中年に亡びた、先生に就して思ふべきは、この一事が
人事と以つても大なる事なり難いことが先生の本懐
なり。

先生は終天の遺憾なく、あつた、先生の大隈侯の惟
美亭に在つての況十七年、四合開設を策し、人々
共事か破れて十四年の改変とす、先生の大隈侯に抱つ
て、冠を掛け、先生の策し、氣運を
促して、況廿三年、議合開設の況、勅命煥然とせん、
先生、之を拜して、歎天喜地、言さるる、そのか
あつた、君の大隈侯を助けて、改進黨を創立し、
の、立憲政況の準備をし、外さるる、先生は、
いて、立憲政況論の大易を著し、名を振、立憲法草案
を作つて、立憲政況、言さるる、先生は、
廿三年、を待ち、持つた、立憲政況論の巻首
に、立憲政況を見、る、詩、朝、居、

教先期、花明未刊、先刊と云ひ、歌よ

お見たと契りし、このまじりてば、おはる運

おの思ひ

とある。先生の夢寐も、回念を思ふれば、花の閉く
てゐる終りすお見たと契りし、このまじりてば、おはる運
他界へ来たこと。先生に於て遠慮とするむじろひさ
その考、於て此上より痛恨が思ひこころゑる、こと
又何時か胸一杯にさる。

欲市を念ふことすらある。先生の荒平の英文の行
を心りおし、その刊行の資を得んとし、比がまきを
出来さるるに、その際、何人かお出づれば、長文の古の間の
草稿が残るおるか、まきこころと刊行費一萬五千円

を要するとして、内平田の私産を売却せしむる心
ふか他の一萬圓の力及び、頼むに官由者から賜金
を得たいといひおる。先生が少々の條約改正に、**熱中**
し、比がまき現はる、若し此の條約の改正を見るまじ
生も長くくせさる、おのん比、あらうか、おあし此の
改正を見るの、條約後ひある、先生の、おあし此の
大隈君が此の改正の衝、方り、一脚をさる、**熱中**
のあつた、こと、先生の歿して、**熱中**後の事、**熱中**時、
先生お生ぬか、あつた、恐らく先生の侯の帷幕、おひ
津身、の力を、おあし、こと、おあらう、大隈君の、**熱中**
の改正、**熱中**の、おあし、**熱中**、おあし、**熱中**
と、おあし、**熱中**の改正、おあし、先生、**熱中**、**熱中**、**熱中**

張一北才二の病恨々といふはあは

小野先生の意見と云へるに何を論じて西洋の思想を心解し
まゝに謂ひて其の奴隷とやらのことか其のたゞ必らず日本の歴史
史に於て日本の四術に於て中心の説を立てば、四術を汎論し
就し云ひの憲法を定むることの如く四術を人び模倣するの
ては如何い日本にその憲法があるといふは、歴史的に日我憲
法史料を研究すに於て如何に以て識念を問するに於て必ず
を説くも西洋の観を以てるべきも亦必ず
す日本の歴史や(野)先生も亦各程の説を以
較して中心の弊を論じて其の民法之骨髄を
も西洋の戦法を論じて其のハ一といふ専ら日本の事實
と謂ひて其の改進黨の宣言より其の理論と趨
つて其の危険として目的を達するに足る手段を其の

張一北才二の病恨々といふはあは
小野先生の意見と云へるに何を論じて西洋の思想を心解し
まゝに謂ひて其の奴隷とやらのことか其のたゞ必らず日本の歴史
史に於て日本の四術に於て中心の説を立てば、四術を汎論し
就し云ひの憲法を定むることの如く四術を人び模倣するの
ては如何い日本にその憲法があるといふは、歴史的に日我憲
法史料を研究すに於て如何に以て識念を問するに於て必ず
を説くも西洋の観を以てるべきも亦必ず
す日本の歴史や(野)先生も亦各程の説を以
較して中心の弊を論じて其の民法之骨髄を
も西洋の戦法を論じて其のハ一といふ専ら日本の事實
と謂ひて其の改進黨の宣言より其の理論と趨
つて其の危険として目的を達するに足る手段を其の
張一北才二の病恨々といふはあは
小野先生の意見と云へるに何を論じて西洋の思想を心解し
まゝに謂ひて其の奴隷とやらのことか其のたゞ必らず日本の歴史
史に於て日本の四術に於て中心の説を立てば、四術を汎論し
就し云ひの憲法を定むることの如く四術を人び模倣するの
ては如何い日本にその憲法があるといふは、歴史的に日我憲
法史料を研究すに於て如何に以て識念を問するに於て必ず
を説くも西洋の観を以てるべきも亦必ず
す日本の歴史や(野)先生も亦各程の説を以
較して中心の弊を論じて其の民法之骨髄を
も西洋の戦法を論じて其のハ一といふ専ら日本の事實
と謂ひて其の改進黨の宣言より其の理論と趨
つて其の危険として目的を達するに足る手段を其の

先生の學は短命にあらざれば先生の功を述べた仕
事ハ皆大成するにあらざれば改進黨を以て多く憂慮
ハあるが其系統の靈流が今回改進黨を執つてゐる。日英
の對刺業を任せて平福の今天下有数の學
府と云つてゐる先生が洲に東洋館書店の富山屋
と改稱して先生の學を傳へた。此の改進黨が馬氏
が任せて今ハ其業を極めてゐる。先生が十二年間
の心血を凝して著してゐる。國憲憲法論ハ世界の名著
ニ對して遊むものといふ。先生が生前に完成したの
ハ先生の考へて祝するべきである。且其の説を實
地に施すことのみ未だつた。ハ遺憾といふ。先生

段後 是れ欽定憲法を制定するに方り、大なる考
考と云つたことありて、其の今ハ此席にお出で
ある金子子爵の著つたことがあつた。且つ
会制度におよぶ先生の著つたことがあつた。且つ
いふことあることを、先生が十年心血を凝
つた結果、著してゐる。先生が熱誠の何ん
の方面も酬へてゐる。先生亦照らすこと
先生と喪つてから四十年の年月を任せて、
昨ハ今のことと公私の事を思ひ起し、先生を
眼前に活かして先生を對するの思ひが
ある。此場合の一時の間を以て、先生が
いふ。先生が東京の著つた開校を引つて、國憲
を著して先生の遺傳を以て、自ら著して、
最終の著つた。

汎論や日本政治論なども講義された。講義のあるから拍
手喝采の禁物であったが、先生の雄弁は、その時とて不
知く禁を犯して先生に叱られたことを思ひ起す。先生は
先生が改法壇上より主たうと威風凛々たる人となす。このあ
つた蒲柳の体ゆへに、あつたに、渾身の膽力ハ先生の
病苦の羸弱を悉く掩ひ去つて、其非改を弾劾する。一
戦と有りつると、執誠溢んて、反對党と異なり、雨然と容を
改めざるを得無つた。先生が、却齒拒腕と壇上で、対ふ考
ハ儒夫を記す。あるの概があつても、今も身衣に存する
ある。先生は、勤勉細心の人が、東洋館書店の奥の
一戸に、机案を構へ、若連を、一うらうらと、店を學替し、
其日の愛上を、自から計業せよん。店を退かぬといふ

慣例のあつた、先生が、深更に、友人の、先生は、自から奉ずる
ことの薄い人び、他、晩會の、此方、店が大抵、因取えん。ヤン
一片と牛肉一片、先生が、信海の上、其、執つて、火鉢の
上、二、豆わんを、あつた、を、毎々、見に、ことを、思ひ出
先生は、書を、能く、詩を、能く、せん。用事と、倦め、書
を、その、人の、考の、も、多く、押さ、えん。吟詩が、得意、心
快心の、時、殊に、旅中、ら、む、る、度、も、
先生と、旅中、ら、む、る、度、も、
夜中、山河を、渡、つ、た、こと、あつた。先生ハ
旅中と、異なり、詩を、採、つ、た、習慣、あつた。若、中
び例の、留、客、日誌、漢文、と、下、穿、つ、た、美、る、書
かん。後、先生、の、傳、を、編、つ、た、ん、が、大、る、了、後、主

同人の著書

俺んの家から

そしに先生は自家の私蔵から多く出版をされたが、
●第一の傑作は無けんはるゝとあり、原稿は自から筆
を入んては、精力文と驚くべきことありあつた、貞正時代
の若く方の出入を扱ひしもの著述のたゞ東洋流から
物々借聞録があつた、自合はけい、ナマケモノ、若者連合
無つた、徳川傳、無つた、先生は、●戦後先生の遺稿を
を編纂する、ことなつた時先生の親友や、野矢
真一、前嶋、男爵、の状を寄つて、その後の先生は
ハ、その前嶋、ひと、市路、何れも、いふ
編纂者、北人の秘史といふ、其手紙を知り、転送
さん、自合、有る、其、衝、甲、つ、り、あ
つた、心、の、妙、を、い、く、ん、再、見、日、比、為、の、果、す、こ

か出来ず、東洋流の二冊、後、ち、の、手、の、編、纂、を、
れと想、先生を私の仰、戦後、一、つ、時、私
ハ先生の日常の食物を知りて、兵、の、利、便、を、い、
つ、けて、麦、め、し、と、ち、を、出、せ、せ、た、先生は、喜、ん、だ、
●戦後、ハ、麦、飯、が、流、行、と、云、ん、て、一、笑、つ、た、こ、と、を、
想、ひ、た、
て、ん、が、丸、七、忘、れ、難、い、の、ハ、先生、の、橋、場、の、家、に、同、窓
叔、人、と、云、か、く、往、来、し、た、事、も、あ、り、ま、す、先生、の、其、次
義、士、の、梅、内、と、云、ん、た、先生、の、住、居、の、家、扶、む、か、あ、り
ま、す、
住、居、の、事、を、い、ふ、と、先生、を、お、り、ま、す、と、寄、て、一、つ、お、
本、生、成、る、と、い、ふ、を、同、窓、が、教、え、た、事、を、い、
つ、た、義、士、の、家、に、同、窓、が、
住、居、の、事、を、い、ふ、と、先生、を、お、り、ま、す、と、寄、て、一、つ、お、

早大佛殿も年令故に野村君の四十年忌
進遠今を六月十九日早大の講をこゝろき
久し縁あり人を招て講演の事とせしむ
余も亦其かる余の改と老へ此次き。遠博の
日ハ臨む結ひすると思ふと殊と長演説を
試み云々とす所ハ略々患しなり。高日
の演説行をこゝろぬぬぬぬ。此の大石に已
金子堅方の子音も来演説の事今演
説後。その生俱楽部と合意を合意す。
此の演説今に伝へん。この家を出えとす時
偶に余が此の講を殊とす。寺村に托し
噴を此とせし法華經ハ卷二散漸や

成り振別す。余即ち其一卷を抽き振ぬ
て今亦これ有り。演説の節親此の経を
の字を説き。且つ経を山家君の青像
の前捧く。此の経ハ山家下と稱す。よ
て宗淵の校勘を此目刻し。なる也。此経
に就てある云へハ。傳教大師の法華
経と傳ふるよを。宗淵の模刻し。なる也。
て表題も桓武帝の宸翰を取りあり。
版式尤も美し。殊に宗淵の校勘ハ斯思
に重んずる所も。宗淵校勘の字も。委し
校勘も考うめを心す。つと乞懐く
諸君も沙羅く。天保六年十月天台

店主一冊親王も其の跋あり此紙上木の素麻心
を叙す為此紙の跋とすまゝ各書に宗淵目録
の後語あることあり

此紙念合に山崎有野氏の書信を印刷し合
衆に頒つ、中、こたの一紙を揮毫し、今、今、得
めかゝるる、小書、入、自撰の、ち、ら、し、也

東洋館書店開業趣意書

東洋ノ文化ニシテ進ムヘカラサラシメハ即チ已マン苟モ之ヲ進
ムルヲ得ン乎本館ノ起ル決シテ無益ニ非ラサルナリ今也泰西ノ新
義東漸海内漸ク文化ノ歩ヲ初メ次ヲ追テ將サニ隆ナラントス願フ
ニ此際ニ在テ何物カ最モ能ク斯文化ヲ開キ最モ能ク之ヲ進ム豈ニ
文書其物ニ非ラサルナキヲ得ンヤ唯夫レ文書ヤ實ニ文化ヲ開キ實
ニ之ヲ進ム然レトモ之ヲ發シ之ヲ行ヒ之ヲ千里ノ外ニ通シ之ヲ萬
人ノ手ニ致スニ非ラサレハ汗牛充棟ノ多キアリト雖モ亦誠ニ文化
ニ益ナキ耳文書果シテ之ヲ天下後世ニ發行セサルヲ得ス是ニ於テ
乎書舖ノ業始メテ貴トシ蓋シ書舖ハ文書ヲ發行スルノ務メニ服シ
之ヲ千里ノ外ニ通シ之ヲ萬人ノ手ニ致シ以テ文化ヲ開進スルノ一
大媒助ヲ爲スモノナレハナリ我邦古來書舖ナキニ非ラス特ニ近世
ニ及ンテ書ヲ鬻クモノ日ヲ追テ増加シ都鄙ノ間實ニ萬ヲ以テ數フ
其數固トヨリ少ナシトセス然レトモ其業タル尙ホ未タ完備ノ域ニ
至ラス爲メニ講學讀書ノ人士ヲシテ凡上良書ニ乏シク篋底善書ナ
キノ歎アラシム吁々又今日ノ一大欠點ト謂ツヘシ吾儕蓋シ茲ニ感
スル所アリ頃日自カラ奮テ此書舖ヲ初メ大ニ其業ノ完備ヲ謀リ聊
カ文化ヲ開進スルノ媒助タラントス乃チ約ヲ龍動、巴黎、伯林、新約克
ノ書肆ニ結ヒ多ク泰西名士ノ新書ヲ舶載シ本邦負望ノ名家ト議シ
頻リニ政治法律哲學史乘ノ新篇ヲ開版シ以テ廣ク之ヲ江湖ニ鬻キ
夫ノ講學讀書ノ人士ヲシテ凡上良書多ク篋底善書滿ツルノ感アラ
シメントス請フ内外ノ花客本館開業ノ微旨ヲ察シ屢々光顧ヲ垂レ
本館ヲシテ其意ヲ貫クヲ得セシメヨ嗚呼東洋ノ文化ニシテ進ムヘ
カラサラシメハ則チ已マン苟モ之ヲ進ムルヲ得ン乎本館ノ起ル決
シテ無益ニ非ラサルヲ知ルナリ是ニ於テ乎此詞ヲ作ル

東洋館主人謹識

東京神田區小川町十番地 東洋館書店

○前々存男の因像を延き保る因造と舊のあり

拜啓益々御清穆之段奉賀候陳者昨年五月塚原周造氏海事關係
五十年記念祝賀會舉行の際は奮て發起人たることを御受諾被
下難有感謝仕候其當時印刷物にて御報告申上候祝賀狀況中に
記述致置候通同氏の青銅立像を塑像家の泰斗新海竹太郎氏に
委囑中の處今回左掲寫眞の通り頗る美事に出來上り一を塚原
氏へ贈呈し一を遞信省博物館に寄贈仕り候間重ねて御報告申
上候
敬 具

大正十五年五月二十五日

記念祝賀委員長 内 田 嘉 吉

市 嶋 謙 吉 殿



塚原周造氏立像寫眞

今次其細意を感るにあり余が骨記ありしに其加
す、こゝに紀念とししに、わのおく 六月二十日

○市井をさうしあきく下谷のえりをもとめ
田の細川に字を各一冊を贈ふ 二月廿一日

一 薩摩風土記

三冊

字をうと移すの語をぬき、薩
摩の事七物うまのて琉球をゆ
のこことを多く載す、バテンの事
法人ちあ人のこと其の風俗をも
あきす、風土記とハなぐ地事候
のものさう、丹志候えさ風土
山人系さう

一 新高藩日記

一冊

古字本半紙本とて、其書元紙

十二行

の編むるをから如きう徳の氏の末次
まの記報さう、新藩のさう年中の
市一町の控候、程々控りさうをも
採録し紙後徳に として價値
あさうものさう

一 米頭志林

の版

四冊

此方陳眉公王穉登等の序あり
の刻美故也、前年東坡志林と
併せたる蘇米志林を得て家蔵
す、版式異るるを覚わぬと今出
てお照の取直し、此の版並し併
刊り底本さうん、朝鮮紙内本を

この表紙を以て 價二十圓

一 表紙四種

親父不台早号問 一冊

お愚当正 蘭徳方画 天竺八

年心 七回三十一頁

二 口少勘略縁起 一冊

三 橋長三之丞 蘭徳方画 寛

政元年刊 序に浅黄重長成

政とあり、こゝに板元花也意次

郎のこゝ也 七回六十六頁

二十四孝安否治合 一冊

蘭春待香保為心 寛政十三

年刊 末一枚脱了二回七

京係胎内不産 一冊

享和四年京係心 終子京係

と見えぬ 丑月四頁

一 逸心録

一冊

天保年間松浦武四郎が時勢に顧
又家系の圓防に就ての諸書を摘録し
自ら出版し与ふもの也此を録也

一 孤山先生遺稿

十三冊

肥後の文芸家孤山の集時習歌、

出版せんや否、此者極めて稀覯なる部
下に出ること雖も、人として無し、収めざる所
五冊、文五冊、外に凡島館集詩并
文二冊あり、大波の者、皆原居片断
に依りて刻せしむ、文化丙子、東京、肥中
老翁、大奉行島田良家の序あり
刊年推定せしむ、浅香、淡久、居に於
て贈し、價六十圓也
序を案ずると、此者の出版は古賢物也、頼
春、亦の経、徳：他、也併て記す

萩事變五十年追悼會

明治維新の偉業は實に勤王傑士の精忠努力に賴ると雖も、往時廟堂功臣の間動もすれば政論主張を異にして柄鑿相容れず、甚しきは干戈を擁して争ふ者あり。前原一誠君の朝を辭して故山に歸臥するや、奥平謙輔君も隨て官を罷め萩に隱る。君等類に時勢を慷慨し、同志を聚めて國政の利害を痛論し、朝廷に進諫し國家の良謀を策せんとす。多數の志士氣鋭く言逼り、卒然萩事變を起すに至る。然れども事順ならず敗れて刑に就く、是れ諸君の爲に深く惜み切に悲む所なり。前原君は資性俊邁にして寛度あり、少時吉田松陰先生に學び、諸友と俱に尊攘の事に盡瘁す。戊辰北征の役、越後に在りて軍事政務共に功績多し。越後府判事より更に兵部大輔に任じ、參議に進む。奥平君は豪宕不羈、好て書を読み詩文を善くす。北越の役、軍營に參謀たり。後ち權判事を以て任に佐渡に赴き、宿弊を更革し治績大に擧る。越佐の諸人深く兩君

の徳政に服せり。また會津攻戰の際、敵軍に對する措置の如きは、善く武士道の面目を施し、頗る時人の賞讃を受けたり。後年會津人永岡久茂等、思案橋一黨の右の擧に與するが如きは、其の平生景慕心服の致す所にあらずして何ぞや。其他事變加盟の諸子横山俊彦山田顯太郎、佐世一清、有福尚允、小倉信一また尋で起れる町田梅之進以下孰れも俊才奇傑にして、一旦禍亂に投じ空く死途に赴きしは遺憾言ふに忍びず。誤て國法を犯せるも本是れ愛國の志士にして、畢竟政見相異の致す所に外ならず。その皇室を尊崇し國家を憂慮するの精神に至りては、毫も情理に戻る所なし。是故に朝廷至仁、深く諸君が刑餘の人たるを惜み、曩日憲法發布の大典に當り、悉く罪名を特赦せらる。後ち又前原君に從四位を、奥平君に從五位を贈らる。天恩枯骨に及び、感泣何ぞ勝へん。若し諸君をして幸に天年を全うせしめば、才幹智力善く國家に貢獻し、天下を益するもの蓋し多かりしならん。思うて斯に至れば、萬

感益切なるを覺ゆ。今や事變を距る已に五十年、往事茫茫殆ど夢の如し。仍て茲に有志相謀り、追悼會を開催して右事變の爲に淪歿せる諸君の幽魂を弔慰せんと欲す。冀くば同情の諸君子此擧を贊成せられ、一滴の哀涙を濺ぎ一炷の薫香を薦められんことを。謹みて白す。(發起並贊成人)

- 一、時日 大正十五年七月三日午後二時開會
- 一、場所 東京芝公園内増上寺に於て(晴雨に拘らず)
- 一、會費 金貳圓也

(六月十五日迄に東京物町區内幸町一、五防長俱樂部内尾原雄之助宛送金の事)

追悼死者氏名左ノ如シ

斬刑	前原 一誠	同	渡邊源右衛門
同	奥平 謙輔	同	小笠原男也
同	横山 俊彦	同	蜷川行介
同	山田 顯太郎	同	町田梅之進
同	佐世 一清	同	田中圓亮
同	有福 尚允	同	大和多道輔
同	小倉 直人	同	井上俊三
同	玉田 信一	同	大和來三
同	吉田 太郎	同	永岡久茂
同	栗屋 新熊	同	竹村俊秀
同	黒田 會門	同	中根重七
同	佐世 文彦	同	井口慎次郎
同	自殺	同	其他諸氏

萩事變ハ既に五十年の既往に属す、恰も余が十七歳の時より、北原前原等の變に死すこととの爲の追悼會を催せんといふ事あり、公閉状ハ日本及日本人に載せしむる乃ち左の如し、余前原奥平と舊知親交定し日支障なくけん、往時事せんことと傳ふに彼等ハ維新の過渡期に於て急流に泳ぎ得ず、かくして横江に溺れ、敢て朝軍皇家に叛く事、罪を犯し、斯の悔みんあはき、この上、世に傳ふに、吾んも其の死者の爲の追福を乞ふの事、今年も喜ぶといふ

六月廿三日記

CATALOGUE OF BOOKS



ハ得おのつこゝに徹底的な調査を待たずして、後あるお
 高の骨が折れ、冊数も多いたが、此ら出るといふ間、学
 び容易に読了し、大急ぎで送付することが出来たから
 本朝の世の中、日ハコ二十枚の後の後物の出るのハ
 早くもさういふ、苦心の續出する困る、
 ○去る二十日、東京市ハ各戸を以て蠅を捕らうと
 ため、結果、十五石式斗、及ん心と新多紙ハ報
 てふる、此の蠅を捕らふこと五十二里に達すると、か蠅
 捕デーは毎年、初夏に捕らふべし
 ○五山文学や五山詩傳倚り、を著き、その世間、
 知るん、京都の上村観光ハ十日程前、塔ん、自殺
 を遂げ、観光も好者家、と知る殊、五山版の

佛に味もあらず、饅頭もあつた。志わし山氣があつて
儲け仕事にはまう。天明とて首の回らぬ。あゝの百貫
と有りとおれたといふ。ぬき家のい前、島田鞠の経死
あり、今又親克を親、書物のか棠の比譯む。あ
こまの、氣の小さい奴等也。
○大隈侯の侍にせし、彼も侯の若い頃の事をも
いろく物も、しに、一枚の氣板の、いよか出
てきた、さんと袴をつけ、あ杖を、持き、左手
軍目扇を振りか、し、腰に大氣を着、け、あ
る、圓の、其の懸、乃、劍舞師、その中、し、あ
るが、美の劍を、名、業と、う、この、本家本型
か、いんじ、劍、あ、い、この、を、さ、ん、び、の、の、り、と、思
ふ。

あとおおしく、感、甘、思、ふ、の、か、間、未、つ、て、あ、る、
え、と、侯、の、言、と、つ、し、も、カ、カ、持、と、ま、ま、せ、い、よ、あ、
ふ、い、つ、つ、と、復、言、を、得、ぬ、と、家、に、存、し、ぬ、と、思、ふ、
て、あ、る、

○城後の小正浄法寺あり、こちら、又、起つて、あ、る、
木崎方面に、起、ら、れ、の、に、就、中、猛、烈、の、お、千、り、地
主、の、余、の、親、族、其、時、に、あ、る、小、正、の、生、徒、三、回、
退、の、を、と、せ、ら、せ、る、別、に、小、正、の、校、を、此、ら、ん、と、し
た、り、小、正、の、あ、ま、を、事、あ、ま、り、誂、ひ、来、つ、て、協、
合、領、の、湯、夜、を、さ、せ、り、し、た、木、崎、迄、の、真、
崎、を、悪、魔、と、罵、り、悪、魔、を、着、服、し、
真、崎、麵、包、とい、ふ、を、物、で、し、ま、り、出、し、て、あ、る、

とかひその者有致と。パンとを撰新しと。其の根座
のレヨウウエンドウに揚けておる所がある。正
氣の河法七いさうのが油断のさうなことであ
○小野梓君の追此頃の追悼會の折言も、
上心ゆえの傳の華化者永田新之丞も受け
から、余りハトリスト、マスターいさうして席上演
説を求めたら、永田のつらうい自分、若年むか
先生をえんを得無つた、志がしつと生ずる
説集と書んた後人だ、さうしてわの愛し
先生が開口一番、後余の東洋男児が
この教諭であつた、信る自分(永田)の、其頃の演
説の之れを倣つて、備置から東洋男児の諱

名を傳するのふつた、さうな因縁の傳を伝る志を
起したか、先生の如き持株家の傳を立するの飽
まむ真面目で無けんか、ぬし思つて、一日も天を
二横巻を探す、一日を暮し、其次日の高戒沐
浴して暮暇に筆を執り、冒頭一章と
し、これと云ふた、小野先生に評傳のあるのは、永田の
か始めである。
○昔、江戸の市中、散々々のやうな自身者や書を
印するものがあつた、金棒と鈴書とを曳いた、此の
金棒の形は輪かいくつのかつて突くと、ヤンクウの
音を鳴らす、鈴書も金棒に輪がついておらぬ
さうと曳くと、リーンと響く、鈴書は名のある

それ以上自分らもハ者生時代昔原の了すげえ支々
といつて淋しい國が、此金棒を遠方より集め
かせ共教う、清涼味を有せしあるが、此心上面倒る
よめ、恰も刀を鍛く、扱ふ、よめあつたとい、之を
心する人の江戸中、僅に二軒はあつたとい、云々
とある、麻布といふを、檜瀬、物所、又又人があつた
か、支々、

○明治の八年清軍は幕府の勅令が、まゝいづら
市井に残つて、えんが守えしと見へる、乃木將軍
が、まゝい、小尉位る時代、真中、夜あけし家、ゆき
途中、衣、鷹、蒼菱の南賞、出遇つた、一杯、頼
あか、熱、畑を、つけ、と、いふと、此商人、えん、天下の

の法度、れといふ、あるき、何れ、と、支々、と、深、趣、道、行
する、人、酒を、飲、ま、せ、と、自、心、ま、り、人、に、盗、心、を、お、こ、さ、し
せ、り、ま、り、から、考、へ、から、禁、め、し、て、あ、る、と、支、々、の、さ、ん、だ、の
の、将、軍、七、感、懐、れ、といふ、が、ま、り、時、る、他、に、お、前、の、の
守、る、べき、控、か、あ、る、か、と、支、へ、て、思、ふ、と、半、鐘、が、チ、ヤ、ン
と、さ、る、と、其、方、向、に、出、う、け、し、火、の、ゆ、の、用、を、是、す、こ、と
あ、ら、う、と、あ、る、と、支、々、と、あ、る、此、法、を、大、内、も、者、が、皆
つ、て、山、野、梓、氏、に、支、か、せ、し、所、の、日、本、の、法、律、
法、科、を、得、る、と、熱、心、し、て、み、れ、し、野、君、ハ、願、ふ、感、
心、し、て、是、が、夜、鷹、蒼、菱、を、給、ら、ひ、身、前、に、あ、る、と、
支、々、と、支、々、と、い、ふ、か、ら、是、が、つ、き、合、つ、て、と、頼、ま
れ、大、内、も、し、も、う、く、附、合、つ、て、ヤ、ツ、ト、夜、鷹、蒼、菱、を、授

かしいにかき、その商人に向、何のゆゑか、このお菓子の
大内がやゆえ、目を進、**地境**に、後中、**あさ**の、と、北原
若見して、あや、ちく、**感**し、**比**、

○北原大橋、圓考、**後**、**具**が、成つた、む、**女**、**式**に、**振**、**え**、**比**と
いふ、**丸**、**あ**、**下**の、**中**、**の**、**進**、**心**、**え**、**比**、**前**、**も**、**大**、**き**、**い**
五、**十**、**番**、**田**、**か**、**つ**、**れ**、**と**、**う**、**あ**、**ら**、**代**、**中**、**後**、**境**、**に**、**徳**、**富**、**で**
石、**里**、**子**、**し**、**も**、**大**、**橋**、**の**、**代**、**と**、**宣**、**世**、**中**、**を**、**せ**、**す**、**る**、**治**、**人**、**た**
と、**必**、**し**、**を**、**ま**、**ふ**、**比**、**多**、**ん**、**と**、**政**、**し**、**い**、**為**、**り**、**ま**、**ふ**、**比**、**の**、**比**、**ら**、**う**、**か**
目、**も**、**古**、**宣**、**世**、**中**、**を**、**あ**、**か**、**ん**、**れ**、**よ**、**の**、**ひ**、**あ**、**き**、**え**、**ん**、**ま**、**こ**、**し**、**の**、**次**
聴、**の**、**あ**、**る**、**も**、**代**、**の**、**性**、**格**、**上**、**じ**、**志**、**を**、**持**、**ま**、**い**、**今**、**の**、**大**、**橋**、**の**
方、**か**、**ま**、**う**、**ゆ**、**り**、**比**、**と**、**ま**、**ふ**、**と**、**し**、**て**、**父**、**子**、**軟**、**弱**、**と**、**徳**、**富**、**か**、**い**
め、**比**、**か**、**え**、**づ**、**ま**、**ん**、**ま**、**よ**、**か**、**志**、**か**、**し**、**今**、**の**、**む**、**も**、**感**、**破**、**の**、**出**

未、**ぬ**、**吃**、**を**、**圓**、**考**、**後**、**の**、**私**、**の**、**比**、**念**、**物**、**か**、**い**、**の**、**を**、**家**、**の**、**後**、**具**、**の**
前、**に**、**毛**、**が**、**手**、**を**、**着**、**け**、**し**、**り**、**の**、**丈**、**ハ**、**短**、**く**、**え**、**吹**、**聴**、**こ**、**ち**、**る**、
比、**り**、**何**、**カ**、**比**、**感**、**破**、**し**、**れ**、**よ**、**の**、**無**、**つ**、**れ**、**吃**、**た**、**今**、**の**、**圓**、**も**、**後**
の、**あ**、**り**、**也**、**こ**、**う**、**を**、**あ**、**の**、**ま**、**が**、**著**、**者**、**所**、**元**、**神**、**下**、**の**、**あ**、**る**、**比**、**所**
と、**い**、**ひ**、**丈**、**が**、**あ**、**の**、**報**、**と**、**え**、**宣**、**世**、**中**、**き**、**れ**、**日**、**感**、**か**、**ま**、**し**
○江戸と上方ハ、食物の嗜好、自己のお菓、**か**、**あ**、**る**、**拾**
り、**と**、**其**、**の**、**住**、**民**、**の**、**氣**、**合**、**の**、**お**、**菓**、**す**、**ま**、**こ**、**と**、**く**、**え**、**今**、**の**、**物**、**の**、**嗜**
ぬ、**か**、**異**、**ち**、**り**、**と**、**み**、**る**、**何**、**者**、**ハ**、**江戸**、**の**、**名**、**物**、**の**、**一**、**つ**、**て**、**あ**、**る**、**う**、**い**
ウ、**ント**、**真**、**里**、**と**、**赤**、**火**、**つ**、**め**、**と**、**甘**、**味**、**の**、**徳**、**富**、**と**、**無**、**い**、**所**、**を**、**江戸**、**の**
可、**と**、**ま**、**り**、**上**、**方**、**の**、**味**、**を**、**不**、**知**、**る**、**を**、**え**、**鉛**、**を**、**入**、**れ**、**て**、**甘**、**く**、**く**、**し**、**ま**、**け**、**ん**
か、**子**、**知**、**り**、**し**、**ら**、**い**、**、**、**壽**、**司**、**の**、**い**、**ち**、**に**、**比**、**の**、**酢**、**が**、**ピ**、**リ**、**く**、**と**、**利**、**い**
た、**の**、**を**、**ま**、**ま**、**こ**、**ぶ**、**の**、**上**、**方**、**の**、**甘**、**れ**、**く**、**い**、**の**、**を**、**欲**、**する**、**、**、**塩**、**煎**、**大**

餅は江戸の名物の七福神のそと其の特徵は塩辛の醤油
油をつけてあるが上方は佃煮のやうにと馬倒すと
いふ江戸が三村昔物の随分ある、上方の料理は
誇りのいしファインにおるといふある、江戸を罵
るゝ悪風を以てする、若も上方の料理の法か近
人であるといふおき、保し辛辣を喜ぶ女は上方
の氣風も伝ふ、酢や塩の味もあつて悪風といふを
行とぬ、鬼角羽キエのよの長唄は江戸のよのよあると聞
くと痛快を感ずる味も悪風も江戸にある、痛の一字は
恐ろしく江戸の味の手裏剣も握むあつて、但し一ツ違ふあ
つか、思ふのより上方は昆布も喜ぶ、江戸は海苔を愛
する、ことだ、あの北海の高波は浪が昆布こそ母は江戸

おの、自分甘味もあつて

フワリといふ海苔も

上方の味をさんぞう

であるのに、海苔も

江戸の下をいふ

此の所字一併、料亭、茶屋、酒場の随分

鹽煎餅
いづぞや京都に遊びて曉社君に逢ふ
閑談茶に及び會席に及びしかば、京の
食物甚だ水臭しと笑ひ、大層たしなめ
られたりけり。上方にては物により品
により醤油も濃口薄口味噌溜とこれ等
を使いわくるに、關東にては、何もの
をも眞黒に煮つけて、佃煮流の一味な
り、あの鹽煎餅を見れば坂東武者の風
骨を憶ふなりと冷かされぬ。いまく
しかりしが、地は平安なり、五條の橋
で討死しても、上方もんに鹽煎餅を理
解させるは、鴨河の水を綺麗にして、
叡山鐵道を否決するよりむづかしかる

べしと、無念の涙を吞んですごとく
歸京し、これを山中共古先生に申上た
る處、鹽煎餅はさもあるべし、全體あ
の八ツ橋といふもの京都を代表するも
のなり、ねち／＼として油くさく不得
要領のものぞと言はれぬ。然るに近來
東京に本統の鹽煎餅なく、また鹽煎餅
くひもなくなりぬ。大量生産の花月煎
餅幅を利かし、甘辛がよいよなどとい
ふ通人あるに至つては、泣きたくなる
なり。今戸の煎餅聲を落したりとは
いへ、いつもふりに行けば賣切の憂目
をのみみる、本郷のどろせん電話がか
かる様になり、團子坂の菊見煎餅も十
把一からの焼きかた火の透りよから
ず、築地の天狗もあふくれば出來て
はよい道理なし。伊皿子の三日月煎餅、
第二回の博覽會にて授賞され支店など
もありしが、一種輕妙の味なりし。み
かた煎餅も輕い方なり、醤油に一段の
工夫あるべし。厩橋の八百や煎餅また
よし、されど眞の煎餅の味は堅焼厚焼
にありて、秋葉原の天狗煎餅の如きは
あらざりしに、澁谷の大同に近頃出來

たる煎餅屋あり、あるじの翁昔風に一
枚一枚押へて焼き居る様嬉しくて買ひ
試みに果して古味を存したりけり。
これも賣れ盛れば人など備ひて味を損
すべく、賣れねば稼業にならず、旨く
ゆかぬが世間と申すものぞかし。
大正丙寅五月二十二日稿

一種の特産
ある文、上方の餘
所のもの、上
方も老風と思ひ
換ふ北海の昆布
えうき身をやつ
してある、

の人きな味ハ、アツセリしてある今日の世界さういふことをいふ
 手微蒼もまゝ、泰平の徳澤といふんがあらう、其表
 紙の内容が滑紙らもあるけれども、いつ七刷いて見ると
 今に給ふ滑紙を感する人の人物をどのエキスパレツ
 ションが、御事の真面目さ(まじめ)をいふのも活動して
 みるの、勿論多めの除外例もあるけれども、多くの
 備へる論の文をあらわししておる、ア、浮世傳の
 兼遠(とよとほ)の時、此の缺點のあるの、滑紙方の業
 を押ふの、一種の才を要し、窮る難いと見ると、
 兎角(とら)日をの画家、滑紙の長しとおらぬ
 ○吾等が職業つてある稀(まれ)な複写(ふくさ)合(あ)ひの事業
 七持(しちぢ)続(つ)八年(はちねん)に及(およ)ぶ、及んかある、七二期(しちに)二年(に)継(つ)續(つ)

せん十年(じゅうねん)とある、いろいろ類(るい)似(に)のこと(こと)をいふ、いの古(ふる)あ
 るが、複写(ふくさ)合(あ)ひの敵(てき)ひまの、複写(ふくさ)合(あ)ひの物(もの)神(かみ)ハ木(き)彫(彫)り
 復(たがひ)刻(きり)にある、費用(ひようぎん)が、こころから、木彫(きでん)をやらぬ今(いま)
 ぐ板(いた)木(き)屋(や)の文字(もんじ)を彫(彫)るの、目或(あ)るを複(ふく)写(さ)合(あ)ひの
 いふ限(かぎ)をいふ、木彫(でん)の残(ざん)端(たん)を維持(維持)し
 てあるもの、即(すなは)ち複(ふく)写(さ)合(あ)ひである、唯れ這(こ)に困(こ)難(なん)
 を感(かん)するの、紙(かみ)の供給(きょうきゅう)がある、複写(ふくさ)合(あ)ひといふから、原紙(げんし)
 原(もと)紙(かみ)といふ紙(かみ)を用(もち)ひ給(たま)はる、今日(こんにち)既(すで)に原(もと)紙(かみ)
 日(ひ)換(か)の紙(かみ)が得(と)難(がた)いから、似写(に)合(あ)ひの紙(かみ)を用(もち)おる、
あるが、似写(に)合(あ)ひの紙(かみ)すらあつた、僅らうなる
紙の冊(ふみ)を心(こころ)をいふ、是れことかある、今日(こんにち)の紙(かみ)
 原(もと)料(りょう)が、希な方(かた)が、随つて色(いろ)も變(か)る、ヒキ

七葉つとみよ、昔一の原料が乏の計は、いさゝく漆法を
まじへたりてゐるけんとも、山村の百姓が農具の片
手間、時間惜ます、低い手ど一枚く漆く、四時
の光り方、今望んで得らるべきむらゝの、複木を
を長く維持せんとするに、前金に横の、紙の
問題がある、今の規模が大いある、昔一の風
を漆かきること、世も出来ぬが、三つ四つ、の規模
にせよといろくの程の紙を要するのむらゝか
ら、えんることに、市に実行は難い、今むらゝの披
索がある者、者の想心を考する所もある、後のことを
考くると、既刊の複製本は、頗る貴重なものであ
る、後年、あると、珍重するべきいふ、まむらゝあり

まい

六月廿二日

○幸田露伴の押巻、領布、今をか、よしが、表とさ
れ一紙、或許の價か定まりてゐる、徹し、序を、露伴
價を、えつと、社、中を、揮ふ、こと、無らうと思つ
た、の、自分か、此人に、交つた、頃、即ち、中、の、文名、の、高か
つた、時、分の、思惑、であつた、か、えんが、裏、切らん、か
必竟、生活、難から、生した、援、う、い、こと、と、あ、らう、と、思ふ
と、そ、昔の、露伴の、壁、紙、を、攻、ある、らう、寧ろ、悲、哀
を、感、せ、ざる、を得、ぬ

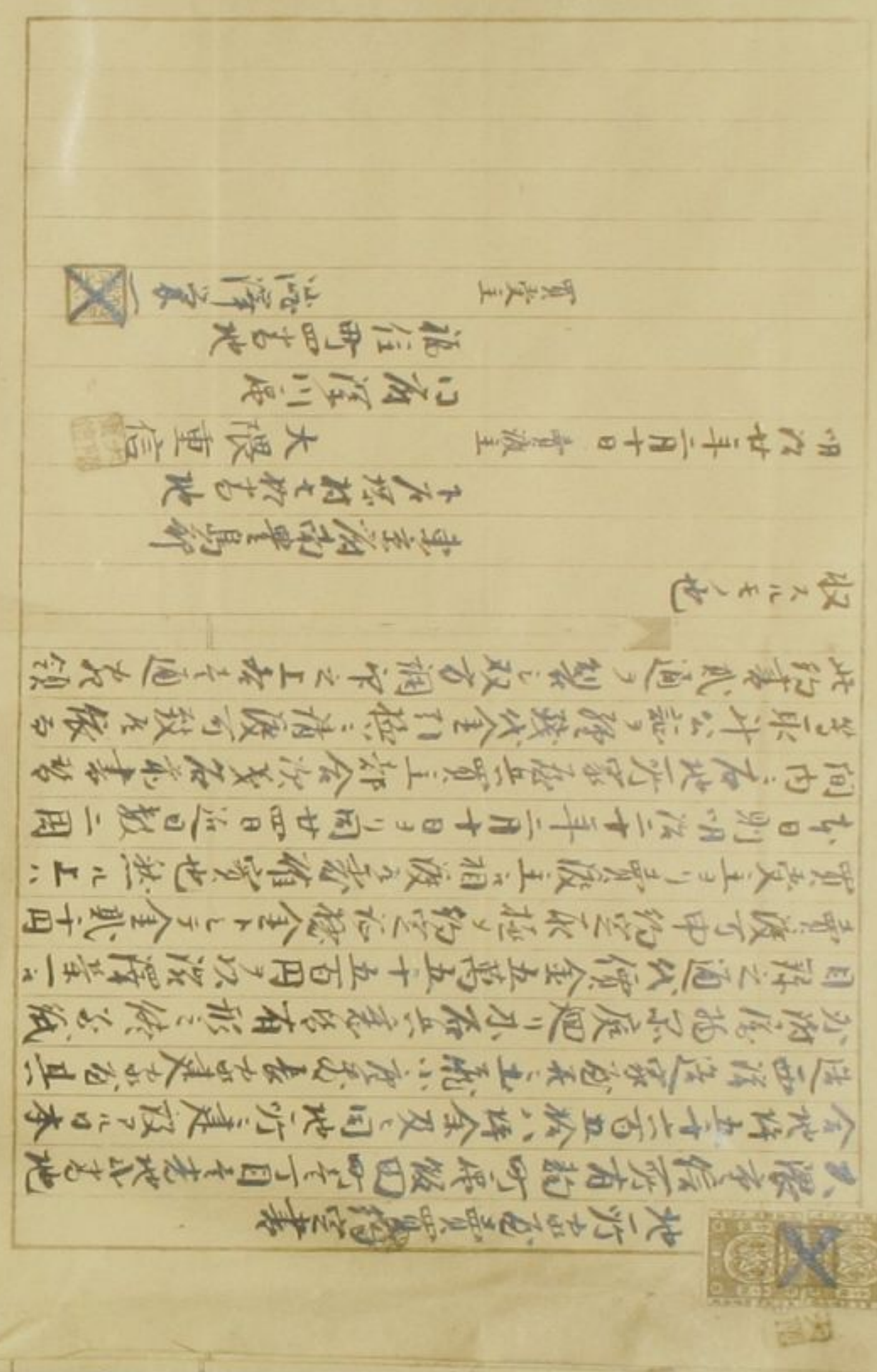
○三木武吉、七、出来、メ、キ、ノ、出、世、して、ゐる、早、大、を、出、した、頃、暫
く、自分の、表現、の、爲、に、この、園、青、松、の、は、せ、つ、と、思、ひ、し
た、こと、か、あ、る、其、後、衆、議、院、候、補、に、奉、け、自分、か、大、阪

伯後援会長であつた時後援したことがある。彼の實際
敗れたが政治の門出に北将である。彼は今でも自分を徳と
してゐる。北将である。彼は今次の市令後援選
挙にあり目から同志の集議を普して大多教
を制した。受けは七十人の候補に少くぬ。彼は
を真つたといふ。皇の出るべきの目くらましのが彼
の手腕も海いよの以。彼は結果、日市長権
主の権を自から握る。彼の、彼は何人をも
るか。八月日を以つて決する。あるか。若し市中
の人を挙げ得ずんば、とを得ず自から出馬すること
いふ。彼は、彼は今出る。早きより久す。據がある。
自重に北将を、目くらま切である。誰の出すとあ

のいふ教派の強弱として責任上出馬を辭すこと
も出来ぬ。のが恐く、市長として強く、彼は、と入免
角十年前、前川八、就悔の的とす。つて、彼は、
と上げ、よ、彼は、核、又、氣、七、春、秋、者
言、ん、び、強、る、ま、り、理、か、あ、る、北、際、の、自、重、に、余、の、最、も、笑
ふ、不、ひ、あ、る、
○（真）也、刑、慧、曰、生、二、林、若、村、の、決、定、權、と、い、ふ、の、確、心
の、柱、名、に、就、て、の、海、法、者、に、か、掲、げ、て、あ、る、余、の、真、目
と、お、浸、じ、あ、る、に、か、柱、名、に、お、り、ぬ、あ、あ、し、此、の、人、ま、
味、も、感、し、て、其、の、ま、し、う、を、せ、く、こ、と、を、知、し、て
お、く、ま、の、偽、り、偽、つ、て、其、の、記、号、を、た、に、収、め、る、此、の
海、法、中、に、今、ま、の、経、歴、を、聊、か、あ、る、か、こ、ん、七、初、身

い
あ
る

大隈侯御書及御印



大隈侯
及御印の
折書
子持郎
買人
とありて
二の二佛後
三代つて
とありてあり

十二行

下まで押かけたが、次第に人少になり、
終に總代八人及智専法印は捕縛され、
吟味の末、明和七年迄入牢仰付けられ
たが、こゝは公方の領分である所から
江戸御老中へ伺をたて、法師は死罪、
其他は追放といふ事になつた。

▲所が、小石川の護國寺から、智専は
僧侶であり、且つ一ヶ寺の住職である
から、一命は御助をと願出たので、御
老中から更に將軍家重に頼ひ、即日將
軍開濟の上、免罪の御書發書を送す
る事になつた。然るに途中海上の爲、
滅刑書狀の小木に著いたのが三月二十
日で、それから村に上り、八幡で一
夜、翌二十一日に相川まで續達した。
所が、法印の死罪は、前から二十一日
に定まつて居たのみならず、刑の執行
は、既に日出前に済んで居たので、折
角の免罪も間に合はず、空しく水泡に
歸して畢した。尤も訴願の簡條の内、
貳拾四は此の事件の後に免された事
の事、然もそれは五十三ヶ村ばかり
でなく、佐渡國一圓に及ぼされたので
あつた。

二一老譚

月刊の雑誌は忙しい。遅筆の私な
どはいつも原稿締切にヤツと間に合
せてホツとする。先づこれで今月は
済んだと思ふのも東の間、もう又締
切が迫る。據らなく今回は今春亡く
なられた淡島寒月翁と今泉雄作翁と
が嘗て集古會席上での對談の筆記を
掲げて其責をふさいで置く。○は今
泉翁 △は寒月翁 若樹記

○淺草の地内(觀音境内)には變り物が
多かつた、あなたの御先代の椿岳さん
を初として伊井峯峯の親爺で寫眞屋を
して居た北庭筑波、畫家の雪齋……
△親爺の椿岳は明治初年に奥山の今の
丁度水族館の後あたりの處へ萬國眼鏡
といふ覗き眼鏡の見世物を開いたが、
其時は西郷さんが「ばんこくめがね」
と假名で額を書いて西郷吉之助と署名
して下さつた。
○這入口には椿岳先生自作の漆喰細工
が置いてあつた、あの邊には皆んな變
り物が集つて居たから一日遊べた。

△眼鏡を出すとき奥山は新門辰五郎の
繩張内だが水戸様御用を看板にしてビ
クともしなかつた。其爲め新門も手が
つけられなかつた。實は維新後親爺は
あの邊の地面を傳法院から只で借りて
居て、夫れを又貸しをして地代を取つ
て居たのです。

○あの邊は植六の地面が多かつた、雪
齋は文晁の弟子で、文人畫もかいて居
た。
△綺麗好きでネ、どこでもキチンと片
付けて置く人で、例へば臺所でも物が
チツトも置いてない、皆んな揚板の下
へ納めて置くといふ流儀でした。
○椿岳さんは後に淡島堂へ這入つて灸
點を下ろして居たが、淡島さんあなた
は灸點を知つてるのかといふと何んに
も知りません、併し痛い處へ下ると
癒るから不思議だといつて居たが、据
ゑられるものこそいゝ面の皮さ。
△淡島堂へ這入つて灸點を下ろしたり
御雛様を出したり、いろ／＼のことを
しましたが、晩年は傳法院の御弟子に
なつてホントの坊さんになりました。

い
あ
る

大隈侯御書受取証(一)

と
又
是
人

本所の柳田藤吉?といふ人は親爺に灸を据えられた一人で、三里へ大きなもぐさをつけられて夫れを團扇であふがれた時の苦しみは一生忘れられないと今でも一ツ話にして居ます。

○あの時分の暢氣な気分はどうも今の人には判らぬ。殊に椿岳さんなんぞは當時でも變り物だから今の人のとの距離は大變なものだ。椿岳さんは維新前から變つて居て、家へ行くと座敷に甲や胃が飾つてあつて敷皮の上にドツカと坐つて居るといふ風で、私の親爺なぞは小林定三の處へ行くと丸で落武者の樣だといつて居た。それに自身は頭は其當時流行の武家風で、月代を指一本這入る程剃つて居て腰には朱鞘の大小をさして威張つて歩くのだから、とても江戸ツ子だとは思へなかつた。

△それで居て夜になると妾に三味線を弾かせて一緒に清元の流しに出たもので、往來で天麩羅でもなんでも立喰するの道樂でした。

○私の家は八丁堀の興力で六七代八丁堀に住んだものだが、私から五代前の

人などは一生黄八丈を著通したもので帯は朱博多、持物といへば朱ビロウドの懐中物といふ持へ、時代は天明か寛政に當らうが、今の人から言はせればマア氣遣ひさね、私の親爺なぞは朝湯が好きで八丁堀の興力でも同心でも皆シなさうだが、家に湯が立つても錢湯の朝湯に行く、同心なら大小を浴衣にくるんで自分で持つて行くし、興力なら仲間にも兩刀を持たせて朝湯に出かける、八丁堀の武家に限つて朝湯に行くとき櫛を髪に懸へ一寸さして行く、男が櫛をさすのは可笑しいが、それが伊達で朝湯に行つて髪を洗つて櫛で梳いて歸つて来る……

△下町の町人の理想としたところは八丁堀の風と、藏前の風とでした、殊に八丁堀の奥様の風俗といふものは一寸違つて居た。

○此間も自身番と番太郎と一緒にして居た人があつたが驚く。自身番といふものはもと、地主などが自分持の番人を置いたのが根元だが、自分は商賣があつたり用事があるので其代りに後に

は家主といふものを置いて家主が詰めたもの、番太郎は町の木戸際に小屋を構へて町の木戸番をさせたのが番太郎それは越後者などが好んでなつたもので、給金は貰へるし住む小屋はあるし、傍ら駄菓子を買つたり芋を買つて暮らせたので望人が多かつた。違ふといへば金棒と鈴蟲とは違ふ。金棒には頭に輪が澤山ついて居るし、鈴蟲には小輪がない。鈴蟲は多く御停止で御座いなと、お觸れをする時なぞに曳くので、金棒の様にジャン／＼とはいはない。リン／＼と響く、鈴蟲といふ名もそれから出て居るのでせう。

△鈴蟲の音は一種淋しい音のしたものでした。

○町内では金棒を競つたもので己れの町内の金棒は何間響くといつて自慢したものです。金棒は刀を鍛へる様なもので江戸中にはタツタ二軒ほかなかつた。一ツは麻布と聞いて居たが、今一軒は日本橋瀬戸物町にあつた。

のいふ、あ時
人の名心量り買
か出来さう
れ

△親爺(椿岳)を最良にされた今戸の大

ふ殿様肌の方は今時はもうない。親爺をつれて芳原へ行かれたがお茶屋で御膳が出ると、割箸がついて居た、スルと此箸は一本しかないといはれたさうです。維新後妙なお好みの家を建てられてどこから買はれたか、徑六尺もあらうといふ太鼓の胴を求められて座敷の中へ据ゑ、其中へ這入つて其處から前の墨田河の風景を眺め、こゝから見ると景色が繪の様に見えると客へも勧められた。ホントに變つた殿様で箱根へ湯治に行かれるのでも本箱を澤山持つて行かれ、それを宿屋の座敷へ並べられるが、扱本箱の蓋さへ取つては見られない……

○私も大河内の殿様とは一寸昌平校と一緒になつた、至極平民的の殿様であつた。變りものといへば玉河三二といふ古物家が居たがこれも亦變りものだつたネ、本姓は鶴飼といつたが玉川さんで通つて居た、元は本郷の玉川といふ水茶屋の亭主だが中々の物識りで能く古物を持へたがみんな引つかつた。可笑しかつたのは京都から歸つて

來て今度得て來たのは定家卿の書いた蕎麥屋の招牌、流石京都だ未だ古い物が残つて居ると言つて、實はこつちで古木へ冷泉様の字を集めて彫つて到頭人に賣つて了つた。一度なぞは甘酒屋の荷をこはして根來膳をこしらへたがこれは旨く出來た。人の處へ行くのに必ず黒い重ね箱を風呂敷包にして持つて行つた、其中にはいつも古物が這入つて居た。

△其箱の中に三倉御塵芥といつたものがあつたがこれは結構なものでした。多分伊太利人のキヨソネに買はれて了つたと思ふ。玉川三二が能く言つて居ました、古物好になつたのは若い時に大坂の兼葎堂(一代?)に行つて斑竹の長いのを見て、斑竹は短いものだがこんな長いものもあるかと感じたのが初まりで古物を集める様になつた。ツマリ兼葎堂でさういふものを見たのが古物のツケ石になつたのです。(完)

○トリストマスターは大概宣席と早上主人席を占
 めておるよすが、そのおるの、此人が挨拶せしむる人
 と御座り、列座の人を指名し、其の演説を聴か
 せしむる、然るに英名が別トリストマスターと字
 職業的のものがある、宣席の音頭をえり人を
 御座り、演説者の順序を従つて呼び出し、役
 せしむる、但し、その順序は、ハフ、ウエ
 ー、ア、のやうな、早おこ起しとある、此より、
 態度言語共に優れ、**服**、**靴**、**古**
 る赤いよをを着てゐる、塩澤博士、山崎海英
 の時ある儀式張りの席に招かれ、初めをこを
 見たと、其、英名、古風、の習俗、が今も存する、と

思ひ

六月廿五日記

○部下全書、伴、聯、分、の、支、主、令、(東、美、作、在、部)
 二、判、り、回、者、を、過、る、(伴、書、拂、度)、僅、々、の、四、五、を、手
 入、り、皆、ハ、鮮、也

- 一 宣王外記 字本 一冊
- 一 宣王外記 字本 一冊
- 一 胸中双六 一冊
- 一 忠臣新前世家 一冊
- 二 書札に京侍心の表紙紙多
- 一 人磨歌仙塚 振本 二枚
- 一 京三條大橋銘 振本 一枚
- 日本金石二通 前者の碑陰記ハ

面拈和考の纂、佛の碑、大和深
上郡柿本郷とあり、寛保年間建
の所、後考の豊臣秀吉の墓を
利す

一 吉原双六 一枚

一 安多手本忠臣裏 一冊

一 和四娼家往来 一冊

吉原双六は近藤地圖の双六より四
位の画を天保年間の上版、忠臣裏
は義士を滑稽多化し娼街を娼家
往来は上方版よりと古珍也

一 華陽記事 一冊

物語徒中年の次徳川初期の事と紀し
たりとありて不完行也

一 大日本史四郡志 一冊

これ志類の内藤氏の殿刊と地誌
とありて又画のよあるんと古坂間と生
の甚し稀也

一 佛国文記謡曲教盛 一冊

以上

○長崎の野々嶽殿退治の具として、諸給を
槍の歴史のあるより、比が後よりお祭り騒ぎの具と
多し、越世の諸侍の日に盛装し、人々、街ふの習俗
が起り、特に諸侍衣裳と唱へて、狎客に祈りつて
化せし、多し、客入りの唐人もあつた、あつた、か、内地の
武家や最高高きもの、えん、う、為、あ、少、か、ぬ、散、狀
をし、比、唐米冬和の比つに和唐珍解といふ
酒、本、本、諸侍衣裳を祈り、多し、ことを手袋
と、し、者、い、て、ある、もの、中、実、多、し、を、い、ふ、比、よ、の、ひ、ある、
唐人が、越、女、を、意、回、約、う、して、滞、崎、中、り、こ、ん、に、親
し、比、丈、揚、代、金、ハ、可、多、う、の、もの、か、あ、つ、た、ら、う、か、い、ん、を
砂糖が、拂、つ、た、とい、ふ、ハ、珍、比、者、又、揚、代、金、に、代、へ、る

へき、砂糖糖も長崎合本といふ貿易の公認の越女
自身生動し、祈り、取、つ、た、とい、ふ、ハ、一、層、珍、比、あ、つ、た、お、女
ハ、砂糖が、受、え、り、多、し、を、金、に、引、換、へ、た、とい、ふ、だ、と、
あ、つ、た、
○昔、一、世、同、也、士、の、間、に、決、闘、に、似、た、約、々、の、こと、か、あ、つ、た、
去、ら、ん、た、妻、が、後、妻、あ、つ、た、節、に、復、讎、的、殺、害、を、試、む
このを後妻打つ、ハ、ナ、リ、ウ、ケ、とい、ふ、だ、い、ん、に、似、た、
こと、か、克、原、に、行、い、た、い、ん、の、標、客、を、奪、い、た、お、女
の復讎、標、客、を、え、り、互、す、為、の、取、方、で、標、客、を、
え、り、い、ん、の、い、ん、を、諸、合、(ア、ミ、ア、イ)とい、ふ、だ、い、ん、が、
以、来、の、慣、習、が、寛、保、十、八、年、名、主、の、家、藏、に、娼、家
全体とお女の後妻が、い、ん、を、奪、り、度、さ、な、た、い、

ハナリ打七踏合も一人お二人はさういふ身方が大
きくして打合ふの事あつた

○佐々木将軍亮の歴々お侍の方の妹お松といふが憎山
端正(常陸下級二万石)の家を白須十兵衛の三男
才兵衛に嫁した。微賤者の出心あるが婿の光りひあ
る。此のお松一爪髪つり、志さうに武藝を修め、又つら
らる刀を佩ひ、侍め輩も佩つてめた、是れは佐々
木の上代に達し、感心するけとあつて、諸藩にひき
奥向に仕へる中七兵衛量次をむ、双刀を許して兼
一の場合に備へるがうらうと将軍にさしお参り
か、りかあつて、花の満一時之れに備へた、その帯刀
せや、まの満さうりうくの名称があつた、或

別式女といふは刀腰帯といふたり、尾張の
後者紀州といふ前番にあり、鍋島丹後守ひの
更婦といひ、榊原式部大権ひの刀持女、酒井雅樂
頭ひの劍帯女、河内御中ひの刀持女といふは、
似る名称が多かつた、大抵二三人乃至四人の女中
佩刀を許す

○太宰春甚若す所の乱婚侍は、幕府迄流儀
結婚の不倫さう例を多く岸く、史料にも價値
あるものあり、昔、甘高亭寺島者を刺し、當時地
方を収めんとし、収め得ず、禱あるありし
よ由る、三田村鳶魚の若り、公方様の一色に
多く、亂倫結婚を叙す、今日亂倫の結婚を

お花畑の頂上へ
遺骸を風葬

アルプス登りは墓場尋ね
が目的の一つ

大倉男が奇抜な願望

南アルプス一帯仙境の大部分は不
思議の話から五十年前大倉男の所
有となつたのであるが男は登山の
希望を有してゐた處で九十歳の
高齡でこの世の思ひ出に來る七
月赤石峰を踏破する事とした男
が登山の
二目的 一遺骨

叙するに易く考へしハ難
し、春其至の二男以の
て見るべき歎、留こ
乱婚侍の言を以て得
て爰に一言を題す
○大倉ハ余を好む同よ
す而も奴まざる田力也
アルプスに己が遺骸
を置かんとする如きし雲
山を汚すといふべ
し、風葬を行ふと云
ぬハ魔心窟と呼べん

墨堤の寮目と丸に遺骸を一炬に附するの可と
す、庶幾くハ罪障一と除却せん歟

○日本國見在書目録一卷大和國室生寺に傳
ある所、往々影寫本と存す、余も一本を獲す而
して信忠寶篋三尊を納めんとて結縁
上林寺なるもの扱めて稀に、こゝろ嘉永辛亥
臘月十日立井橋の段あり、今日購ひ入る如事
の法と為すべし

○大倉の奥の狂言を催す時、町方から狂言人も
呼び上げらるゝが、柳屋の一切外間から呼びぬ
お茶の園子供と大奥のいふものが、御狂言を捲
するの、いふまゝの物に狂言七ヒツと戴

竹冷翁句碑再建に就て

前年御賛同を得て、角田竹冷翁の俳徳を後世に傳ふべく、故翁に縁故ある地を卜して、東京、沼津、京都の三ヶ所に句碑を建設致しましたが、東京神田明神境内の分は、往年の大震災に遭ひて壊滅に歸し、徒らに臺石のみが、塵風濕雨に浴してゐるさいふ始末であります。

これでは當初の趣意にも反きますので、如何にも残念に耐えませんから、こゝに重ねて御賛助を乞ひ、再建を謀りたいと思ひます、就ては甚だ恐縮であります、左記の定を御一覽下さいまして、も一度御喜捨を仰ぎたいと存じます。

大正十五年五月

委員

敬白

幹事

巖谷小波 星野四郎 坪谷善太郎 黒須龍太郎 服部耕石 林部 露竹 星野 藤野 佐藤 山人

定

- 句碑建設費、およそ千貳百圓の見込とす。
- 建設する場所は東京神田明神境内の舊趾。
- 醸金は一口金五圓とし一人數口の申込を受く。
- 但し數人にて一口の申込をなさるゝも御任意とす。
- 申込は五月三十日迄とす。
- 拂込は申込後一ヶ月以内に、振替貯金口座、小爲替、小切手又は集金郵便差立若しくは使差上ぐる等御便宜に任せ可申。
- 申込及拂込報告は、雜誌木太刀に掲載す。
- 會計は建設後一ヶ月以内に報告す。
- 事務は牛込區水道町四十一番地 竹冷會内にて取扱。
- 御申込は封中のはがきに、特に御直筆給はり度、これを當會に保存致し永く紀念と致し候。

竹冷會

東京市牛込區水道町四十一番地
振替貯金 東京三三三三三番

賛成人

岩新 磯邊彌一郎 伊藤松宇 石井健吾
井上辰九郎 盧村彦太郎 大島英豊 堀田伴子
沼間龍彦 岡崎國臣 和藤正治 岡野知十
岡村千冬 渡邊勝三郎 加藤治 渡邊亨
川合玉堂 高木益太郎 丹山梅吉 加藤次
高田早苗 鶴澤四丁 内田勉平 瀧川長教
坪谷善四郎 倉知鐵吉 久保田米齋 浦五實吉
野田卯太郎 山縣鐵藏 山崎林太 安田善次
安田善三郎 舛本喜兵衛 増田義一 安田守一
福田又一郎 郷誠之助 江口駒之助 江崎政忠
跡見李一子 佐野彪太 齋藤三郎 佐々木政吉
佐々木隆興 森無 杉山義雄 志賀重昂 澁澤榮一
平田盛胤 森無 杉山義雄 志賀重昂 澁澤榮一

いと公統と敵秋方古と徳んる。まゐり大奥ひやるる
りわさきと外出しと三世之屋を研究的に見物を
許さん。主伝者さうさうと世々見物とよさうと
かりわさき、移すといつて歌をぬ伎役者といつて
詠し念ひ着附かつらと如の大者道り少りも格
（さ、さうと粗言の海をさし主伝者い皆さ衣裳
道りをも頂戴する。お此の徳一の考のお平南
がはる、而である、さうして毎々式回かぬとす行
りらる、一回に少るるも千両の任責人を要しれど
つゝ但しこゝろと奥方だけのお徳一が御守りな
決しと御説に入ぬことななりとておれと三田
村や鳥居の公方様とさうのれとあるのを思ふ記

まゝ

上田林の記

十二行

十二行

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

